

# 日本生物學會誌

第 24 号



日本生物學會

1987年 8月31日

第 22 号

も く じ

マジメの中の軟体動物：高校生からの報告（一）	861
マジメの中の軟体動物：高校生からの報告（二）	863
水原洋城：猿学万歳（1）	871
上市米：斟酌歌心正体学	882
奥野良之助：金沢城明け渡し異聞（2）	888
生物学誇大事典：後天性教授願望症候群	896
編集者への手紙	898
編集局だより	899
会計報告	903
日本生物学会設立趣意書・投稿規定	904

## 高 校 生 か ら の 報 告 (一)

この前、柔道の初段の推薦の件で話があった。実は我が校では一年から三年まで皆、週一時間柔道が必須なのです。一年の始めに、生徒のほとんどが初段をとって卒業する、と聞かされてホンマかいな？と思っていたが、やはり私の疑問は正しく、私ごときでも初段をとれるのだから、ほとんどの生徒がとれて当たり前。

ところが妙なものが後ろについていた。それは取得料一万五千元である。なんたることか！私はすぐさまその場で申請用紙を破り棄てた。健全なる、かどうかは知らないが、青少年から一万五千元もの大金をふんだくって黒帯と免状を与えるというような、根柢からして下劣だ。これだけあればチロルチョコレート百五十個も買えるではないか。松前重義氏の言葉を借りれば、「講道館は、柔道はオレのもの、世界はオレのものという立場で、講道館の段位でなければ本物ではないという考え方」だそうだから、うなづけなくはない。しかし腹が立つ。私の組のほとんどが講道館にひっかかっている。講道館がどれだけ柔道の普及・発展に貢献したかは知らないし、そんなことは関係ない。単なる一個の私的団体が出しゃばる権利はない。黒帯など市販すればいいし、免状など紙きれ一枚発行するだけでいいではないか。そんなドブに金を捨てるようなことをしてはいけない。チロルチョコを食って栄養つけた方がましだ。＜チロルチョコやないといかんのか。もっとうまいもんがあると思うがな ー 会長＞ 講道館など無視する位の意志はもってしかるべきだろう。＜よりによって講道館なんかにケンカをふっかけない方がいいよ。己レヲ知り敵ヲ知ラバ百戦危ウカラズ という言葉もある＞（考えてみれば日本の柔道界の衰退も講道館と大いに関係があるのではなからうか）＜結構な事やおへんか＞

しかし、推薦を受けられなかった友は言った。「オレやったら頼んでも一万五千元出して黒帯欲しいけどな。」これはもう病気の末期的症状だ。と思ったが、周りは推薦の有無にかかわらず、大なり小なり考え方は同じようなものだった。自分の方が末期的症状なのかな？ そういえば、今日はこんな会話を交わしたっけ。

「お前、大学どこ受ける？」

「そやなあ。京大でも受けるわ。お前どこ受けんにゃ？」

「うん、オレもまだ決めてへんのや。私立は？」

「滑り止めに同志社受けるわ。」

「ほんなら京大滑ったら同志社行くんか？」

「あほな。今さら同志社なんか行けるか。かっこつかんやんけ。この学校入った以上、浪人しなくても京大入らんかったらどうすんねん。それよりな、このごろアバンティエ（注一）に公立の

やつ多いな。あいつら今ごろになって慌てとる。やっぱり受験勉強はもっと早（はよ）からやらんとあかんで。ほんま、今ごろ参考書あさっとるやつおんにゃから困ったもんや。あれ見て、絶対公立のやつには勝ったと思ったわ。第一負けてられるかってんだ。オレ等は勝つために何もかも犠牲にしてきたんやからな。」

「犠牲って、そらちょっと言い過ぎちゃうか。」

「そんなことあらへんやんけ。オレ等特進（注二）は一年から勉強ばかりやって運動あかんし、スポーツクラス（注三）のやつは運動ばかりやって頭空っぽやろ。京大行かんやったら何のために勉強したんかわからんやんけ。お前もそうやろ。」

返す言葉がなかった。この考え方にあきれてしまったと同時に、自分はぬぐい去ったと思いつ込んでいたが、実は心の片隅に追いやって目をつぶって見ようとしなかった自分の醜い部分を、目の前につきつけられたからだ。

こんな、私の通っている学校が京都のあるお寺の境内にあるなんて、口が裂けても言えません。

注一：学校の近くにある、けっこう大きいデパート。土曜日の午後には、我が校の生徒が帽子をかぶって、というよりかぶらされて、必ず本屋の参考書売り場にいと聞いている。

注二：我が校には特進科といって、京大に入れるように特訓されて、入ってから何をしたらいいのか悩む人間をつくる、と私が勝手に決めている科、普通科、自動車科の3つある。

注三：普通科の中に、スポーツのできるのばかりがいる、というより集めているクラスがあって、体育行事のときには常に一番でない担任に相当しこかれるといううわさがあるが、スポーツクラスと呼ばれている。

(マジメの中の軟体動物)

高校生からの報告 (二)

< 資料 A >

生徒諸君へ 修学旅行出発を直前にして特に留意すべきこと  
( 厳 重 注 意 事 項 )

高等学校  
第 2 学年 担任

- (1) 旅行の目的・主旨・内容をよくふまえ、いかなる場合にも、高校生としての誇りと責任をもって行動すること。
- (2) 「物見遊山」や「家族旅行」ではなく、校外学習・集団活動であることをけっして忘れないこと。
- (3) 準備を確実にしておくこと。(持物・衣類・服装・頭髪・健康状態・その他)
- (4) 服装は常に端正にし、ことば使いも荒々しくせず、挨拶など礼儀正しく、良識にしたがって行動すること。
- (5) 1～2名の身勝手な行為で旅行団全員に迷惑をかける心しないよう心しておくこと。(5分前の集合・敏速な行動など。)
- (6) 貴重品(お金・時計・カメラ・その他)土産などは各自で管理すること。(紛失しても責任を負うことはできない。)
- (7) 健康については各自で十分に留意する。(バス中でよくしゃべる者、ホテルでなかなか寝ない者、ボサッとしている者からバチる。)
- (8) 「旅のはじはかまして」「集団のかけにかくれての愚劣な言動」「全体のことを忘れた我がままな言動」などを厳につつしむこと。
- (9) 不祥事は絶対にないこと。(万引・トラブル・酒・タバコ・暴力・盗み・転落事故・交通事故・その他。)
- (10) 旅に出ると人柄がよく分かる。(心のあたたかい人・気をつく人・家庭の賑・責任感の有無・その他。)
- (11) その他、先生方の指示とパンフレット「旅」の諸注意などを厳守し、規則を守り、若々しく楽しい旅行にすること

( ホテルでの注意 )

- (ア) 入 館 前…① 下取準備・荷物をまとめる。② 車内の美化 ③ 部屋名、ルーム販を覚えておく。
- (イ) 入 館 時…① 2列 ② 脱帽 ③ 挨拶「今日は」「よろしくお願ひします。」(頭を下げる) ④ エレベーターは使用しない。
- (ウ) 入 館 後…① 下履を靴箱に入れる。ホテルスリッパ使用(整頓)  
② 部屋施設・備品・調度品の破損箇所を調べて報告用紙に記入、副委員長に提出(室長)。(また決して破損しない。)  
③ 更衣(規定のものに限る)。廊下を下着のままや裸で歩かない。  
④ 貴重品回収 — 副委員長は、大袋をもって各室をまわり室長から「破損箇所調査報告用紙」とともに一括してうけとり

フロントまで待参する。

(貴重品は翌朝まで出すことはできない。)

(各部屋備え付の金庫は使用しない。)

- ⑤ 各部屋の冷蔵庫・風呂・電話は使用しない。  
(市外電話はフロントの赤電話による。)
- ⑥ 全員指示があるまで部屋に待機している。(その間に副班長または室長はフロントに部屋入口の鍵をもらいに行く。)
- ⑦ 委員長と、食事、入浴系のクラス代表は入館後ただちに筆記用具をもってフロントに集合する。
- ⑧ 委員長・副委員長は伝達事項を確実に各室長に伝え、室長はその指示にもとづいて班員を責任をもって指揮指導する。
  - ・入浴時間・方法・場所・留守番
  - ・食事時間・場所(水筒の処置も含む)・鍵
  - ・その他(クリーニング・諸注意など。)

- (エ) 外出…① 制帽・制シャツ(上・下)・身分証明書を携行する。
  - ② 外出・帰館の際には、必ず玄関係の先生に報告する。
  - ③ 立入禁止区域には絶対に入らない。トラブルなど起こさない。門限厳守。
- (オ) 就寝と起床…① 入室時間以降は廊下に出たり他室に入ってはならない。
  - ② ミーティングを十分に行う。
  - ③ 消灯後は、ゴソゴソせず、早く眠る。
  - ④ 起床したら布団をよく整理する。用便を必ず済ませる。
- (カ) 出発…① 美化係は家具・調度品を入室前と同じにしておく。
  - ② 小さなゴミも処理しておく。
  - ③ スリッパ脱帽、窓カーテン閉じ、洗面所など整理。
  - ④ 水筒をうけとる(食事係)。
  - ⑤ 貴重品をうけとる。(副委員長)
  - ⑥ もう一度忘れものはないか、美化が徹底しているか確認。
  - ⑦ 副委員長は各部屋を最終点検して担任に報告。
  - ⑧ 委員長はクラス全員を廊下にまとめ、2列でバスへ誘導。  
(エレベーターは使用しない。)
  - ⑨ 副班長または室長は鍵を責任をもってフロントに返却する。
  - ⑩ 挨拶を忘れない。(「お世話になりました。」「ありがとうございました。」)

### 〔バスでの注意〕

- (ア) 5分前の集合・点呼を厳守する。(班別・クラス別で行動する。)
- (イ) 乗降車は無音かつ低速であること。靴の土をよく払って乗る。
- (ウ) 「運転手さん、ガイドさん」と呼び、朝夕必ず挨拶する。(お早ようございます。ありがとうございました。)
- (エ) 親しいなかにも礼節を失わない。失礼なこと、野卑なことは言わない。
- (オ) 運転技術については、絶対にとやかく言わない。
- (カ) ガイドさんの説明をよく聞き、ガイドさんのやる気を失わせない。

- (キ) 車の窓から、ものを投げ捨てたり、人をからかったり、ものを買ったりしてはならない。
- (ク) 帽子をとばしたり、手や顔を絶対に出さない。
- (ケ) 下車の際、帽子を正しくかぶり、服装を正す。(シャツはスソを中へ、靴はズボラ履きしない。)
- (コ) 車内の美化、整頓につとめる。
- (カ) 委員長は必ずクラス旗をもって下車する。
- (シ) 座席については担任の指示に従う。
- (ス) 車酔い、病人についてはクラスでよく助け合い、ゆずり合う。
- (セ) バス後部には荷物を積まないようにする。

#### 〔船での注意〕

- (ア) 担任の指示・誘導に従って乗・下船する。(押し合ったり、ふざけたりしない。)
- (イ) 荷物・カメラ・土産物などは必ず荷札をつけ、クラス別、班別に整理する。
- (ウ) 船酔いする者は、予め薬をのんでおく。(外に出ない、横になっている。)
- (エ) 不満や、こまることがあったら船員さんに言わないで、担任に申し出る。
- (オ) トラブル・転落事故など絶対にないように注意する。(デッキには1人で絶対に出ない)
- (カ) 船室を空にしない。(交代でクラスや班の留守番をおく。)

#### 〔見学地・昼食場所での注意〕

- (ア) 担任の指示・誘導によって敏速に行動する。ダラダラしない。
- (イ) 各クラス2～4列で、ばらばらにならないでまとまって行動する。
- (ウ) 自由解散の時も、班別で行動する。
- (エ) 服装を乱さない。(帽子を正しくかぶる。第1ボタンをはずさない。)
- (オ) 展示物を汚損したりしない。昼食の後片づけなどもきちんとする。
- (カ) トラブル、一般客への迷惑、万引など絶対にしない。
- (キ) 交通事故に十分注意する。(道路横断 - 委員長・副委員長・班長で)
- (ク) 集合時間を厳守する。(5分前集合の励行)

#### 〔その他〕

- (ア) ホテルの部屋、船室など空にしない。(入浴時、自由時間など)
- (イ) ホテルの部屋、船の個室では内から鍵をかけてはならない。(ホテルで自動ロックのところがあるから注意する。鍵を絶対に失わない。)
- (ウ) ホテル、船の生徒立入禁止、使用禁止のところは厳守する。
- (エ) ホテル、船の非常口、避難具などを必ず確認しておく。(委員長・副委員長と班長を中心に)
- (オ) 病気は一人で我慢せず、早目に申し出て、処置をうける。
- (カ) 生徒手帳は必ず携帯すること。保険証(1面と家族構成欄)のコピーも持参すること。

その他詳細についてはパンフレット「旅」を必ず読んで確認しておくこと。

これは、高校三年の7月というクツ暑いときに、しかも九州に、なんと男だけで修学旅行に行くときに、配られたプリントである。全部読んでいただいたらわかることだが、といっても読む人はいないだろうが、だから説明しておく、おせっかいと矛盾に満ちた代物である。余りにも長いので細かな箇所にこだわっていると日が暮れてしまうのでさしひかえるが、「ホテルでの注意」の(オ)の③「消燈後は、ゴソゴソせず、早く眠る」、「バスでの注意」の(オ)「運転技術については、絶対にとやかく言わない」、(カ)「ガイドさんの説明をよく聞き、ガイドさんのやる気を失なわせない」などというところには、こだわりを乗り越えてアホらしさを感じざるを得ない。

頭にくるのは、冒頭の(8)「“旅のはじはかきすて” “集団のかけにかくれての愚劣な言動” “全体のことを忘れた我がままな言動”などを厳につつしむこと」である。修学旅行の何日目に「演芸会」というわけのわからんものがあって、まさに「失礼なこと」「野卑なこと」で充満し、「旅のはじはかきすて」「集団のかけにかくれた愚劣な言動」「全体のことを忘れた我がままな言動」の典型とも言える「芸」を被曝して下さった。「旅行の目的・主旨・内容をよくふまえ、いかなる場合にも、〇〇高校生としての誇りと責任をもって行動すること」(冒頭の(1))とはこのことかとうなづいてしまった。まさに、「旅に出ると人柄がよくわかる。(心のあたたかい人・気のつく人・家庭のしつけ・責任感の有無・その他)」。我が校の本質を露呈する実にいい機会であった。今年の二年生も九州に修学旅行に行ったそうだから、彼らは実にいい経験をしたことになる。九州に限ることなく、北海道、東北、関東、……と全国に修学旅行に行き、更に恥をさらしてほしい。

ちなみに、修学旅行の目的は次のとおりであった。

- 一、旅行を通して、団体生活のあり方を体得すること。
- 二、広く見聞を深めること。

一、は達成された。なぜなら、この旅行以後、皆が「団体生活など成立し得ない」と悟り、エゴむき出していけにえの羊に襲いかかる結果となった。「マッカーシー旋風」が吹き荒れはじめたのもこのころからである。私は、遠山 啓 著作集・教育論シリーズ3「序列主義と競争原理」を読んでいたが、「あぶない本を読んでいる」と言われてしまった。「中核派」「民青」とかには神経をとがらすくせに、「極左11.0番」「スパイ防止法案」「1%わく突破」とかにはまるで関心なく、当然と受け取っているようである。日本の若者の右傾化は着実に進行している。政治屋 (politician の方で、政治家 statesman ではない) の諸君、喜んでくれ給え。

二、も達成されたと言えよう。鹿児島では必死でラ・サール高校を探していたから、「広く見聞を深めること」ができたであろう。いずれ、ラ・サール高校を襲撃するのかな？

と、ここまで書いたところで、日本生物学会誌第23号が届きました。驚いたことに会費100円より高い170円の切手ははってあります。(当り前か) <当り前じゃないよー 会長> 生物学誇大事典「カモ」は、笑えるような笑えないような何とも複雑な気持ちにさせてくれました。

それと、半仙半魚氏の「偏見と独断(9)」にも書いてあった「制服」についての我が校の見解を述べた文書が多数見つかったので、「制服」特集にしようかなと思ったが、疲れるし、第一読んでつまらなくて、今後ネチネチと追求していこうと思う。次に挙げるのは、高一の確か四月に配られたプリントです。

< 資料(B) > 次ページ

まず、「制服」うんぬんに宗教をからめてくるところからしてクサイ。「釈尊の出家の弟子」の典型と言えはすの坊生が、突てこりんな“密約”を交わしたり、歓楽街でベントを乗り回して好き放題なことをして、庶民の不評を買っているのが周知の事実となっていては、だれも信用なんてできやしない。

「来るべき社会的活動に備えて学習することを要求されてい」ても、この学習が曲者だ。クソ面白くもない遺伝の計算なんてやめて、もっと生物の本質にかかわること、生物というのはこういうもんやということをお教えなければ<だれが教えるねん>学習意欲もわからないし、「来るべき社会的活動に備え」することもできない。ところがどっこい今の社会では、生物の本質を理解するより遺伝の計算がうまいほうが、優遇され得るようになっている。だから東大や京大の学生は、「娯楽とか身を飾るとかの世間的欲望を極度に抑制し」なくともよいというのが、社会の暗黙の了解となっている。従って地元以外の大学へ行くとなると、東大だったら借金してでも金を用立てるが、東大以外だったら行かせられないという結果になる。<我が息子は大成張りで金をもぎとって、ワカヤマ大学へ行きよったぞ>

「さらに学校という一つの共通の目的をもった場所において、集団として行動するために統一された線というものがなければならないと思います。それを制服という形で表すのであります。」に至っては、こだわりを通り越して笑いを禁じ得ない。なぜなら、これは教師が自分の力不足(というよりは、むしろ無能といたい)をはっきり明言しているからだ。本来教師であるなら、制服なんかなくたって学生を統一できなくてはならないのではないのか(どんな「統一」かは問題だが)。<どんな統一でも統一なんぞしたくない — 無能な教師>教師の職務を自ら放棄したと言っても過言ではないだろう。<今そういわれて怒られてる — 会長>

次の資料も同時期に配られたものである。

< 資料(C) > 次々ページ

前回説明したとおり、I類は普通科、II類は自動車科、III類は特進科である。「本校では生徒が自己の適性や希望等に応じて、卑下することも高ぶることもなく、落ち着いた充実した勉学のできる」はずなのに、あるI類の生徒が、合格者体験記の最後にこう書いている。

「普通科からでもがんばれば有名私立大学はもちろんのこと国公立大学も可能である。因に普通科から現役で神戸大学に3人受験したが3人とも合格(法学部・農学部・工学部)した。後輩諸君の一層の奮励努力を祈ります。」(傍点は筆者)

## 制服についで

制服は戒律の象徴であり、古来、釈尊の出家の弟子は黄衣剃髪が原則となっています。これは最も質素な服装を着け、頭髮という飾りを落とすことにより、日常世間の欲望を捨てひたすら真理の道を歩むものであることを内外に示した姿であります。学生も黄衣剃髪こそしないけれどもその心構えにおいては共通であり、入学宣誓は出家に当るし制服は黄衣に当ります。

また、学生という身分は生計を立てるための繁勞から解放されている代わりに、來たるべき社会的活動に備えて学習することを要求されています。学生は自ら労働しないのですから、娯樂とか身を飾るとかの世間的な欲望を極度に抑制しなければならないことは当然のことでありましょう。

制服制帽等いろいろ規定されてきますと、なんだか自由を奪われたように感ずるでしょうが、世間の一般的な考えに立っては勉強はできないもので、戒律が制服という形を取り、自己の定めた戒と外からの律によって厳しく自己を抑制してこそはじめて勉強と取りくむことができるのであります。

また、およそ人間なら働くことなしに生存することは許されないでしょうが、学生は働かない代わりに將來の準備を社会から要求されていることとなります。ですから勉強をしない学生というのはあり得ないこととなります。特に複雑化し高度化した近代社会にあって、それに適応し得るためには十分な基礎知識が要求されます。

以上のことから理解されるように、学生という方外には質素な服装、内にはひたむきな勉学ということに集約されます。さらに学校という一つの共通の目的をもった場所において、集団として行動するために統一された練というものがなければならぬと思えます。それを制服という形で表すのであります。

本校において制服が定められているのはこのような基本的なあり方に由来するのであり、生徒諸君はこういう意味を十分汲み取って、身心を正し、どんな場合にも **高校生であることを忘れないように行動していただきたいと念願するものであります。**

## 高校の人間像

現代が人間疎外の時代であるとも、放蕩喪失の時代であるともいわれますように、とかく私達現代人は生きる方向を見失って、真の生きがいが見出せぬまま、心の内では不安と焦燥の日々を送っていることが多いといえましょう。高校生期は特に悩みの多い、傷つきやすい時期ですが、生徒達はこういう現代の社会的状況の中で、心を満たしてくれる「何か」を願ひ求めながらも、世の風潮に流されて、心に満足のないまま、無自覚的に大事な時期を空しく過ごしてしまいがちであります。

仏教では「人身受け難し」といいますが、実は生徒一人一人、受け難い人身を得て生まれてきている尊い宝であります。教育の課題が本来、人間の内なる「よきもの」を引き出すことであり、それを自覚の上に成就させる産婆術であるといわれますように、本校においても、まず何より、生徒自らが未だ発見できずにいる、自己の内なる真に尊ぶべき「よきもの」(宗教心・魂)との出会いをあたえる媒介的役割を果たすことが、教育の根本でなければならないと考えております。

これは申すまでもなく仏教の精神であり、学祖弘法大師の建学の精神でもあるわけで、生徒銘々が無明の自我におおわれた真の自己に目覚め、この世に生を得た意味を知り、将来社会のどの分野にいても、それぞれの持ち前、個性に応じてその社会の「一隅を照らす」ことのできる真人(菩薩)になってもらいたい、というのが本校教育の根本的目標であります。本校の校訓、「自己を尊重せよ」「真理を探索せよ」「社会に献身せよ」はこの本校教育の願う理想的人間像(菩薩)のあり方を端的に表現したものであります。

この人間像実現のため、本校では次の四つの具体的実践項目を掲げています。(一) 規律を守ること。真の自己に目覚めるためには、まず主観的な自己を抑止し、真の意味で自らを解放させる戒律を遵んで守らねばならない。(二) 清潔であること。純粋に道を求めるためには、学ぶ環境を清浄にし、また自らの身姿も、学ぶものの姿勢によさわしく、簡素で清潔に保たなければならぬ。(三) 情操を豊かにすること。心の温かい、他に思いやりのある、真に社会に献身できる人間となるためには、自他を深く尊重し尊敬し信頼して荒々しい心を去り、内面を豊かにとのえねばならない。(四) 勉学に励むこと。深く自己を知り、また将来にそなえるために勉学に精励することは、学ぶものの基本的態度でなければならない。

本校では生徒が自己の適性や希望等に応じて、卑下することも高ぶることもなく、落ち着いて充実した勉学のできることを願って、普通課程の中に「類・類・類」の三つのコースを設けていますが、生徒が以上四つの実践を通してそれぞれに、本校の願う理想的人間像の実現を達成してくれるよう心から念願しているわけでありませう。

この人もいわゆる有名大学に相当こだわっているようだが、この人の言っている通り、I 類の生徒を「卑下」させるものは確固として存在している。教室や机・いすの質にも差はあるし、時間割も III 類に都合よくできてるし、受験術にたけたような教師はすべて III 類に回っているらしい。といっても、受験にたけた教師に教えられるという点では不幸かも知れない。<かも知れない、ではなくて不幸だよ>

これらに優るとも劣らず、というよりこれが本質と言うべきなのだろうが、III 類の生徒の偏見が大きき原因となっている。I・II 類の生徒をかけた平気でばとうするし、また聞いている方もそれを当然と受け止めているし、前回報告したように京大病患者が大半である。

そろそろ疲れたから、読む方も疲れていると思うが、私の習っている数学教師の言葉でもって、カッコよくしめくくろうと思う。

#### < 資料 (D) >

金沢にいた頃、童話などの創作に凝っていて、誰かに読んでもらいたくて、その当時新進の今江祥智という作家が今の文教短大の講師をしているのを知って、はるばる京都まで出てきた。その時今江さんは、自分の童話を百人の人に読んでもらって、一人、本当に一人の人に感動してもらえたら自分の仕事はそれで良い、などという事を、手塚治虫には負けるということなどと共に話してくれた。

卒業生の皆さんの仕事といえは、これからは専門的な分野に多岐に渡っていくわけだけど、今までを振り返って見れば、■■■■の勉学と生活以外に無いわけで、それは呪う程に、夢にうなされる程に苦しかったけれども、その懸命な姿を端から見守って認めてくれた人が一人、本当に一人はいたかと考えてみて、その最後の一人である自分までが、いや適当にサボったなど■■■■っていないか。

だけど私は、実は、そうは思わない。私は■■■■で訳の分からぬ数学を訳の分からぬままに教師と

いう肩書が強権発動になって、授業などと大それた事業をしているのだけど、私が本当に数学の持つ美しさ、数学のデリカシーを伝えたいのは、50人のクラスに1人居れば良い方で、後は漫談になってしまうという方が多い。50人相手にして1人の感動を得るという方法が取れない。1人の反感を得る為に49人を犠牲にしている。

師匠が弟子に学ぶという事がある。私の数学観をひっくり返す生徒が1人は居るはずだ、私はその1人の為に授業をする。事業を為すという事は命掛けであると思う。命は身体的なこともあるけど、人生観を賭けるということもある。その意味で私は、百人の人に読んでもらって、お前は狂っている、という手紙を待つ。

卒業生の皆さんの中に、なぐさめ合い、傷の替り合うだけの友を求めた人はいなかったか、自分の欠点を指摘してくれる本当の1人を遠ざけようとした人はなかったか。

(数学科教諭)

(マジメの中の軟体動物)

一匹のおおきなオスのサル、カシの木の枝の上から、下の山道を登って来る一人の学者に呼びかける。

猿 よお 御気嫌さん どこ行くねん。

学 おっ 久し振りやな。いや どこへて、さっきまでお前らの群れのあと つけて来てたんやけど、あそこの尾根すじ越えたところで まかれ<sup>て</sup>してもてな。ここやったんか。

猿 相変わらず興信所かいな、よう飽きんこっちゃな。そうそう、こないだも、群れのメスどもがうわさしとったで。「あのおっさん、うちのあと つけまわして 双眼鏡でのぞきまくって、写真とったり 録音したり、帳面に だれがいつどこでだれと何しとったか書いたり、やらしいなあ、ほんまにプライヴアシーの侵害やで。ただののぞきやったら 見るだけで満足しよるけど 学者は、それをネタに銭もうけするさかい タチ悪いわ。そのうちビーピング・トムみたいに罰あたって 目えつぶれるわ。ざま見い。」いうてな。

学 えらいいわれかたやなあ、そない銭もうけてへんで。もともととは純粋な知識欲から出たことや。悪う思わんといてや。

猿 純粋が聞いてあきれれるわい。そんなもん わしから見たら 変態知識欲じゃ。

学 むちゃくちゃやなあ。ところで、他の連中の姿が見えんようやな。どこ行きよったんや？

猿 知るかいな、あいつら多分 お前をまいてから尾根すじ登って 向うの谷へ下りて行きよったんやろかいな。

学 やろかいなで、お前 あいつらと一緒にやなかったんか。

猿 わしはな、もう三日も前から群れと別れて ひとりて勝手に歩いてるねん。

学 ええっ ほんまかいな。こら一大事や。ノートにつけとかなあかん。ええと今日は何日やったかいな、ひいふうみいと、つまり六月の一五日からか。一五日はたしか曇り時々晴れやったな。その一五日以降、L1、群れを離脱、ソリタリーとなる、但しこれは本人、本人はおかしいか、本猿の証言による、と。一八日 一時三〇分、大岩附近のアラカシの樹上で発見、休息中、群れとの直線距離約五〇〇メートル、東谷へ移動中の群れと逆ルートで西尾根方面に向うものと認む—— と。とりあえず群れを追わなあかん。ほんなら また。

猿 こらこらこら、こら学者、待たんかい。

学 何や、わし群れを追いかけんとかかん。忙しい。

猿 何が忙しいねん。群れやらいつでも見つかるわい。このわしに インタヴューしていかへんのか。

学 それもそうやな、いうたら、はなれサルになるちゅうことは、その個体と群れとの相互の関係やからな。こいつから もっと事情聞いといた方がええかもわからんな。

猿 ぐじゃぐじゃひとりごとというな。その前にこっちから聞きたいわい。その、お前のいうてた L1 とか、ソリタリーで、それいったい何のことや。

学 ああ このノートの字かいな。さてはお前 わしの書くとこ、木の上から見てたな。

猿 あほか、わしはお前みたいなのをきとちゅうで。第一お前のきたない字やら読めるかい。お前しゃべりもって書いてたやないか。それが聞えたんや。

学 何やそうか。L1 の L は、リーダーの L で、1 は 強い弱い順位が1、つまり群れのサルどもの中でお前がーばん強うてリーダーやさかい お前のことを L1 という記号で表わすねん。それから ソリタリーちゅうのは、群れを離れて、ひとりで暮している個体のことや。ひとりサルともはなれサルともいう。

猿 気色の悪い話やなあ。お前 国民総背番号制推進派の手先とちゅうか。リーダーやらいうもんがまずわからんな。わしはたしかに一番強かった。そやけど、何でわしがリーダー呼ばわりされなあかんねん。

学 何でかいうたらな、群れのサルどもが食物探して森の中をあちこちと遊動するときに、その動きをリードするさかいや。どっち向いてどこへ何食いに行くか、いつ止っていつ出発するか、決めてみんなに知らせる。犬やらたちの悪い人間やら猛キンやら物騒な奴に出合うたら、警戒警報発令してみんなを、かくれさすか逃すかして、自分は敵の前面に出て、追い払うなり けん制するなりして群れを守る。まだあるで。リーダーは常日項 群れ全体ににらみを効かせ、けんかの仲裁、秩序を乱す者への懲らしめも、こまめに勤める。一方、他のみんなは、そういうリーダーの役割や動きを認めてリーダー中心に集まり、リーダーを頼りにして、いつもリーダーから目を離さず、つき従う。こういう、リードするものとされるものとの間の関係は、いうたら 群れをまとめる社会制度みたいなもんで、そのおかげで毎日の遊動生活が続けられる。その統合のかなめのリーダーが、L1のお前やっちゅう訳や。

猿 結構なお話聞かしてもろて おおきに。ほんまに教育勅語の解説か、それともどこぞの会社の管理職研修会の説教かと思うくらい、ようでけた話やった。

学 得心いったか。

猿 せっかくやけど得心いかん。とんと身におほえのないことばかりで、いったいどこの世界の話かと思たて。どこが得心いかんか今からいうて聞かしたるわ。まず第一に わしは群れ

全体をリードなんかしてえへん。第二、方向も行先も時機も決定せえへん。第三、合図も指示もしたことない。第四、警戒警報発令した憶えない。第五、けんかの仲裁も懲らしめもやらん。第六、わしの存在が群れのまとまりのもとやいうのも事実やない。第七、わしらの群れ集団に社会制度みたいなもん あらへん。第八、群れをまとめる役割を果たしてるサルやら どこ探してもおらん。これがわしの答えや。

学 全面否認か。

猿 さいな。

学 あっさりいうなあ。ほな聞くけど、お前、群れが発する時、よう「木ゆすり」ちゅうことをやってたやろ。木に登って行って、てっぺんで反動つけて 力いっばい木をゆさぶって、ざざざあて音立てて、<<ガ・ガ・ガ・ガッ>>ちゅうてほえるやつ。それからざあーと地面に下りて来て、えらそうに恰好つけて しっぽ立てて、花道にかかった助六みたいに歩き始めたら、周りにおったメスのサルやらこどものサルやらが、そろそろそろそろそろお前につられるみたいに歩き出した。これ見てたら、「木ゆすり」と<<ガ・ガ・ガ・ガ>>と、いばった歩きぶりで、出発するぞお、これからあっちへ行くぞお、ついて来うい、ちゅうて、出発、その時機、方向を合図で示したことになるやないか。ちがうか。どや。ちゃんとノートについたあるぞ。

猿 ごくろうさん。そらそれでええ、まさに事実や。けどな、お前も学者やったら、ここで考えなあかん。まず、合図や。「木ゆすり見ててお前、あれ何やと思てる？」

学 攻撃的誇示行動のひとつで 優位性の誇示であることもある。何の何がしここに在り、という感じやな。

猿 ほなら 威張って恰好つけて しっぽ立ててのっしのっし、は何や。

学 これも優位性の誇示行動と見なせる歩行やな。

猿 この二つの行動のどこに、“これから”や“出発”や“あっち”や“ついて来い”やいう決まった意味があるねん。わしはな、お前もいう通り、ただ威張って、自分の力や勢いを あんな形で発散したいだけや。そらわしにも、それを他のサルどもに見せて、聞かして、注意を向けさせよう ていう“意図”はあるで。なかったら“誇示行動の名づけがうそに近うなってしまうわな。そやけど、やっぱり、そこに決った意味がある、と解釈するのはまちがいや。

学 それでも、お前が、そういう行動を そういう場で示す時には、そういう行動はああいう一定の意味を持つ、いうたかてええやないか。

猿 そら解釈の問題や。しかも結果論に過ぎん。くわしい話は、あとでサルのことばの話がどうせ出て来よるやろから その時いうて聞かしたるけど、おかけ参りやあるまいし、“いうたかてええやないか”程度の議論くり返してて、よう学者がつとまるなあ。ものいうからには根拠が要るねんで。

学 サルにいわれんかて、そんなことわかってるわい。

猿 お前の場合、どういう事実をもって立論の根拠にしてる？

学 観察事実やな。

猿 何の観察事実や。

学 そらお前らの社会生活やないか。

猿 わしらはたしかにより集って群れという集団をつくって暮してる。そやけどお前が実際に具体的に目で見てるのは何や？ 可視的実在の要素は何や？

学 そらやっぱり 一匹一匹の個体やろな。

猿 その個体が？

学 その個体が何をしてよるかを見るちゅうことになるな。つまり個体の行動や。他個体との交渉の過程の観察記述も、個体の行動の記述が要素や。それが関係を論じ、構造を語るようになって、……

猿 つまりだんだんとほら話がおおけさになっても、やっぱり、根拠となる事実関係は個体の行動の記述に求める他はないねんな。

学 そらそうや。

猿 それやったら、さっきの攻撃的誇示行動には、他にあれこれの“合図”の記号的意味がもとと含まれてますねん、ということじつけ解釈の根拠は、あの行動のどこにあるねん。ああ、こじつけに根拠あったらおかしいか。形容矛盾や。今の取り消し —— 要するに根拠ないやろが。ええ？

学 そういわれると、いささか自信が無うなってきたなあ。そやけどな、結果論かも知らんけどな、ある一定の個体間の交渉の流れちゅうか、社会的文脈ちゅうか、行動を介した相互の反応の時間的展開があって、お前の「<<ガ・ガ・ガ>>つき木ゆすり」と「のし歩き」がきっかけとなって、群れが動き出した、ちゅうことはたしかやろ。

猿 そうや。わしにかて、そういう意図があった。それにみんなが うまいこと乗ってついて来よった。こういうことは時々ある。お前がそのそのときの帳面に書きつけた例は、まさにその一例やってん。

学 そやからその時は、お前の意図と連中の反応がびたり合うてやな、お前の意志が効果的に連中に伝わったんやないか。ほんておれは、お前の行動が合図として機能し、効果をもったんやから、それを合図ととって何が悪いかと……

猿 何が悪いかて？ 悪いのはお前の頭じゃ。学者の頭の悪いのは、一種の犯罪やちゅうこと知らんのか。雑儀なやっちゃんあ。あのなあ、事実としての行動の観察記述が立論の根拠になるて お前もいうたやろ。ほなら、「木ゆすり」と「のし歩き」は、他にいっぱいある社会的諸文脈に、どないな作用を及ぼしてるか、みんな調べんかい。それから、何が共通してる

か吟味せんかい。特殊で他に適用できんような解釈を引っ込めんかい。その上で、改めて基本的な規定をつくらんかい。その結果それが攻撃的でも優位主張でもええさかい、要するに誇示行動としかいえなんたら、それを基礎にして、それが時と場合で社会的文脈上にこれこれの作用をし、しかじかの効果をもつ、て正直にいうたらええのとちゃうか？ もうちょっと論理的にすじ道を整理してくれや。

学 よう理屈いうサルやな。わかった。先行ってくれ。

猿 わかったらよろしい。ええと、あの時はな、群れのみんなが、だいたい一日の採食もすませて、休息もした。こどもも遊びたいだけ遊んだ。ほちほち今日の泊り場へ向けて 尻上げようかなあ、てなムードが全体にゆきわたりかけてた。わしもそろそろ行くかなあて気分になったさかい、一発恰好つけてこまそか、ちゅうことで誇示行動をやって歩き出した。“エッケ・ホモ”、つまり“この人を見よ”をやったわけや。

学 お前はサルやで。サルやったら“エッケ・シミウス”やないか。

猿 そうか。まあええ。とにかく、それにつられて、みんながついて来よった。方角も行先も主だった古い連中にはだいたいの見当もついたやろ。ほぼ一せいに群れが移動を始めた。そこを お前が見てて、さすがにしーやなあ、水ぎわ立ったリードぶりやなあ、みんなあいつに心服してんねんなあ。《ガ・ガ・ガ》のざわざわざの、ピンの、のっしのっして、出発 移動方向 追隨を指令したんやなあ。一系乱れぬ統制と、意志の伝達やなあ。リーダーの役割遂行の手本やなあ。ほんまにしーは、いつ見てもほれほれするなあ。サルにしとくのもったいないなあて、そののぞきの帳面に書いたんやろ。ちょっと見してくれ。

学 あつかましいやっちゃん。そんなこと書いてえへんわい。

猿 ところがな、わしらからいわすとそうやない。今いうたような条件がそろうてる時は、いかにもそのように見えるけれども、みんながその気になってえへん時は、わしがせっかくええ恰好しても、無視しよる。そやから、わしも、意図は隠して、いや何でもなし、ちょっと威張って見ただけや、てな願して、他のことする。メスと毛づくろいの続きにもどったり、気にくわんやつ見つけて、おどかしてびびらしてみたりしてごまかす。それになあ、それまで移動しようと思てた“意図”そのものかて、すうーと引っ込んで、落ち着いてしまったりするんや。まあサルちゅうもんは、それくらい気が変わりやすいともいえるけどな。それからまた、ちょっと恥しいけど、こんなこともあった。例によって誇示行動がわりかしうまいこといって、みんな動き出したさかい、とんとん歩いて行って、途中で、周りの様子がおかしい。あれ、と思てて見まわすと、だれもついて来よらん。《グオー》いうて、伸び上って遠くを見ると、なんといつのまにか連中は、わしの登って来た道からそれで向うの沢すじを下りて行きよるのが目に入った。わしちょっとあわてて《ウワー》《ンゴ》と大声出してみただけど、連中はお互いに《ホイー》《ワアー》いうて、ちょっともこっちに注意向け

よらん。つまり、わしのこと完全に無視して、あさっての方へととととと 離れて行くばっかりや。わし頭へ来たけど、もうこらあかん。しゃあない。そっちへ走って行って、やっと追いついた。ほっとしたけど、やっぱりちょっとぐらいは好悪かったで。

学 あっははは、そんなこともあったんか。こら知らんかった。そらおもしろい。傑作や。ははははは。見たかったなあ。

猿 何がおもしろいねん。笑てる場合やないで。そやけどお前がいうてるリーダーちゅうもんが思てるほど大層なもんやないということが、これでわかったやろ。

学 それもそうやな。お前にひつつくようにして一せいに動いてるな、と思ったら、全然そうやない動きすることもある。いったいどうなってんねん。

猿 わからんか。サルはな、いつもお互いに群れのなかまが、今どんな気分にあるか、それとなく気いつけてるもんや。そらしょっちゅうけんかもするし、いざごども起こす。それでも常にいっしょに居りたいし、みんなのするようにしたい。他のやつについて行こうとする癖が生まれつきだれにでもあるねん。一方でまた、なかまが何匹か居ったら、おれがおれがと我を張って、集団の動きの先を行きたい、自分の動きに他の奴を巻きこみたい、という癖も、同じように生まれながらにしてだれにでも身に具わってあるねん。そやから群れが動く時に先頭切って行くもんが、わしならわしの時もあるし、メスが先行する時かである。時にはこどもらがとび出すことかである。それについて行くも行かんも、みんなの気分がそろてるかそろてえへんかによる。みんながそろそろ三々五々動き出さなんたら、先に行った奴ももどって来るし、あさっての方へ行った —— わしみたいにやな —— 奴かて引き返さんならん。そんなもんや。

学 そうか。そやけど不思議なような気もするなあ。お前の周りに大せい固まって、川の流れるように さあーっと行くとこ見たりすると、やっぱりお前が目立って。お前やっぱりみんなに頼りにされてんのちがうか。

猿 そらな、いうたら何やけど、わしはけっこう頼りにされてた思うで。ただな、その頼りにされるちゅうのと、わしが常に群れの遊動をリードする、連中が特定の個体にのみリードされるちゅうのとは 話が別や。さっきいうたようにな。それから始動の時に特殊な意味をもった一定の合図が出されるいうのもうそや。事実としても考え方としてもな。わしが頼りにされるような時はどんな時やいうたらな、それは、みんなが共通の不安におそわれるような時や。外敵の接近もそうやけど、薄明薄暮、霧や風雨、農作物荒しに行った時、かくれ場のない開けた場所を横切る時、こんな時はどうしても、みんな不安やわな。力が強うて経験の豊かなまんのまわりに みんなかたまりたがる。自然な気持や。そうやない時は、それがふだんの時やけど、のんびりして、広々と散開してる。おとろしいおっさんの側はがら空きや。これも自然な気持ちやろ。おっさんの姿が見えんでも気にせえへん。

学 そんなもんかなあ。いやそんなもんかも知らんあ。次は警戒警報の話やけど、あの有名な  
《クワン》ちゅう声が特別の意味——危いで、気を付けえ——やないとしよら、どう  
いう声やねん。

猿 これもあとでまた話さんならんことやけど、何ちゅうことないねん。思わず出る声や。外敵  
か、外敵でのも、めったに見ることのない、けったいな、気色の悪いもんに出合うたと  
か、音聞いたりするやろ。緊張が瞬間的にぐわっとたかまったら あんな声出るねん。ど  
んな奴でも出しよるで。こどもかて出すで。そやけど、わしらぐらい海千山千というか、胆  
も太いわ、面の皮も厚いわ、尻だこも硬いわちゅうもんやと びっくりしても おびえて縮  
みあがることはない。意識せんでもすぐ次の事態に具えて、次に何が起こるか 見きわめて  
対処しようちゅう態度がとっさのうちに出来る。そやから《クワン》、《クワン》いいも  
って、油断無うあたりを見まわす余裕も出る。お前らかて「火事やあ」でわめく時に 同じ  
叫び声でも、火に水かけもっていう奴、逃げもっていう奴、座りしょんべんしもっていう奴  
いろいろあるやろ。そやから、あかんたれの《クワン》はたいてい無視されるけど、わし  
らののは、おびえの感情が抑制されてるぶん効き目があるねん。あのおっさんがあない緊張し  
てんねんから、こらよっぽどや、とみんなばあーっと逃げるか、さあーっと隠れるかする。  
ここに反応の差はあるけど、もとは一つや。発声者の気分や。警報やあらへん。

学 はあ、なるほど、くわしいことはあとまわしにして、次は仲裁と懲らしめや。

猿 けんかしてる奴がおるやろ。そんなん見たら、わし無茶苦茶腹立って来るねん。何でて、けん  
かする奴 興奮して怒り狂うてるやろ。攻撃性の固まりの、むき出しの、権化や。ニホン  
サルの性分として、自分よりあかんたれの奴が目の前で攻撃性むき出しにしてるのん見過せ  
へん。この戯鬼何さらすんじゃあいうて、とびかかる。どっちが悪いか、よう見て、冷静に  
公正な判断を下す気やら、根っからない。

学 ちょっと待て。それはまあええけど、お前らのけんか、いつ見ても一対一とは限らんやろ。  
けんかしてて負けかかった奴が逃げ出したら、その後から相手と、それに介入する第三者の  
もっと強い奴、まだ強い奴、更に強い奴と三匹も四匹もの奴が追いかけて行く時があるやな  
いか。その時最後につかまってやられる奴は 一番弱い奴一匹や。みんなから集中攻撃受け  
て、どえらい目にあわされよることあるぞ。お前の説明やと、優位のオスは、けんかしてい  
る奴のより攻撃的な方に腹立てるねやろ。すると後から追うて来た連中は、次々と前の奴の  
けつに食いつかんならん理屈とちがうか？

猿 そない簡単にいうな。そういう時は、また、もっと複雑になるねん。二匹のうちの攻撃的で  
偉そぶってる方にかみつく心理の他に、悪びれて逃走しようとする奴に対して腹立てる心理  
と、優位者との共感を強調しようとする心理が働くねん。

学 何や。ややこしいな。ほんまかい。

猿 ほんまや。お前らにかて、だしぬけに逃げ出す奴は、怪しい奴や、曲者や、挙動不審や 何

ぞやましいことのある奴やないか、ちゅうて疑う罔っ引き根性みたいな心理の働きはあるやろ。強い奴が近づいて来よった時に、いきなり走って逃げようとする、たいてい強い方の攻撃性を誘発する。この時にやな、弱い方は、悲鳴あげるかだまってるかやけど、強い方は必ず大げさな威嚇の「ガ・ガ・ガ」を発しながら追う。そこへいろんな奴が介入して来る。こいつらは逃げてる奴に対してももちろん腹立てるけど、追うてるもん同仕で、顔見合せて、攻撃目標の一致と怒りの共感を互いにたしかめもって追うことがある。お前はより強いもん順の介入のこというてたけど、逃げてるもんより強かったら、介入の順番はどうでもええねん。肝心なことは、自分がキツネ狩りのキツネにならんこっちゃ。かしこい奴は、追いかけれもって、途中で事件と関係ない弱いもん見つけて攻撃して、キツネの役なすりつける、てなこともしよるで。スリが人ごみの中で大ぜいに追われてて、自分もみんなといっしょに「スリやあ」て叫んで、うまいことテカから逃げたりするのと、同じようなもんかな。このへんの騒動の話はお前のいうてた“仲裁”の話から“懲らしめ”の話になってまうけど、これも、さっきからいうてるように“自分の目の前でえらそぶってる奴けたくそ悪い”気持ちと“急に逃げ出す奴けたくそ悪い”気持ちと“わしも追いかけてる強いもんのなかまに入って偉そぶりたい”気持ちと、これだけの、あんまり高尚とはいえん心理の組み合わせや。まあ、お前ら学者も含めて人間の世界でも、いちばんありふれた心理かも知れんなあ。まだわしらの方が、銭欲しや、と権力指向が無いだけましやけど。

学 お前の話は いや味がいつもおまけについでるなあ。そうすると、“仲裁”も“懲らしめ”も、現象の正しい把握の表現とはいえんということか。次は六番目の問題の、お前の存在が群れのまとまりのもとやとはいえん、ちゅうことや、これは、さいぜん半分ぐらい聞いたな。だいたいはわかったけど、お前のリーダーシップやとか、他のサル共のそれに対する追従のせいやないとする、サルの群れはいったい何でまとまってんのや。

猿 これも さっき半分ぐらいいうたと思うけど、ごく簡単にいうと、わしらニホンサルは、元来そもそも群れをつくってまとまるもんなんや。それが本性やな。他のやつについて行こうとする性質が 生まれつきある、ちゅうのがその半分か。

学 あとの半分は何や？

猿 もう半分は、サルには、生まれつき 他のサルと関わり合おうとする性質がある、ちゅうことや。この二つの性質、つまり行動上の生得的な傾向があるさかいに、サルの群れは常に、世代を越えて保たれて行くねん。

学 “ついて行こう”と“関わり合おう”とが群れの形成と維持のもとかいな。拍子抜けするほど 簡単な話やなあ。

猿 真理は常に簡明なもんじゃ。

学 えらそうにいうな。ところでその簡単にして明瞭な真理やけどな。どないして立証できるねん。

猿 それも簡単や。生まれたてのあかんぼが居よるやろ。その社会的に全く無経験なあかんぼの成長して行くところをじいっと見てたらええ。あかんぼどもがどないして母親から独立して行くか、どないしてあそび仲間をつくって行きよるか、どれくらいの時期に母親以外のなかまの動きにつられて動きよるかを連続観察するねん。そしたら、びっくりするぐらい早うから、さいせんいうてた二つの生得的な行動傾向が出現することがわかる。くわしいことはまたあとで話して聞かしたるけど、今のところはこれくらいでええやろ。要するにお母はんとか他のおとなが改めて一々教え込まんかて、リーダーたらしいもんが力み返って引っ張りまわさんかて、群れは自然とまとまるようにでけたあんねん。

学 そんなもんかなあ。七番目と八番目とは今までの話に部分的に重複するから、またあとで聞くことにして——聞いたかてどうせぼろくそにいうだけやろけど——、最後に聞きたいのんは、お前が群れを離れたいきさつや。わし流にいうとL1のソリタリー化の話の聞こやないか。できるだけ包みかくしのないところでひとつ願わわ。

猿 心配すな。包みかくしやする程大層なこと何も無いわい。お前こそわしの話のわい曲せんというた通り正直にそののぞきの帳面に書かなあかんぞ。学者の取り得いうたら、あつてそれくらいのもんやさかいな。

学 一々腹の立つことという奴やなあ。どうでもええけど、“のぞきの帳面”いうのは止めてくれへんか。これはな、フィールド・ノートいうねんぞ。

猿 かめへんで。いい方変えたかて中身の質が向上するわけやなし。

学 何なといえ。早速聞くけど、何ぞ群れの中で、お前が群れを離れないかんようなことでも起こったんか。

猿 いや、別にこれというてないけど、お前のいうその“何ぞ”には、たとえばこんなことちゅうような想定が含まれてんのんか？

学 いや、ごく一般的にいうてやな、お前とだれか主立ったやつとの間の直接的衝突——けんかがあったとか……。

猿 あ、そういうことか、それはなかった。あったとしても、それでかりにわしを負けたとしても、わしの方に出て行く気がなかったら、出て行かいても済むこっちゃ。

学 他に体の調子が悪いとか、ストレスがたまって、自律神経失調症になったとか……。

猿 ないない。元気なもんや、会社人間やあるまいし。

学 好きなメスにふられたとか……。

猿 あかんあかん、今何月や思てんのじゃ。発情期やないで。お前ら時無しといっしょにせんといてくれ。

学 そうか、まあ、こんなことぐらいしか想定は無いねんけどな。追い出されるにせよ、追ん出るにせよ、出て行かんらんような社会的圧力ちゅうか、規制力ちゅうか、そんな力

が働いたという事実はないということか。

猿 ない、少なくともわしが、こらかなわんな、と思う程というか、こたえる程には働かなんだというこっちゃ。とにかくやな、素朴な力学的世界観の短絡的なたとえ話としての、個体間の引力や斥力を想定して、それから社会的諸関係を説明する悪いくせが、お前にもまだ残ってるような。学者がその程度やから、素人は、はなれサルいうたら「村八分」にされたサルや、と簡単に思うてしまうねん。しかもその手の発想には“体制”としての“群れの意志”みたいなものがその成員としての個体を規制するもんや、ちゅう粗雑な国家有機体説の粉末をふりかけた全体主義的観念論がからんでるわな。この観念論は さいせんの素朴實在論と元来わりと相性がええねん。気いつけなあかんで。

学 わしは唯物論者のつもりやあってんけどなあ。

猿 さあどうかなあ。せいせい素朴實在論程度のもんやないか。そういうのは「ユイブツロン」やのうて「タダモノロン」ていうけどな。

学 何ちゅういい方や。ところで、お前は追い出されたとか、余儀なく出たのやないとしても、そもそもサルが群れを出る時に、追い出されるいうことは、あるのか。

猿 わしの知る限りないな。群れを出て行くサルは、—— これは専らオスやけど —— 老いも若きも、自分から勝手に出て行くねん。自発的にな。

学 ということは、お前もそうやちゅうことになるが、しかし L 1 で一群五〇匹ものサルどものかしら務めてたほどの奴が群れを離れる。群れから見ると失なう。あたり逸材を惜しい、という気もするがなあ。

猿 そやから、リーダーの話のところで、そない大層なもんやないていうたやろ。あとで群れに出合うたら、よう見ても。わしがおったころと遊動の様子はまったく変とらんはずや。そんなもんやで。逸材ていうけど、その逸材かてよその群れから来ることもあり、また別の群れに入ったら、そこでまた、経験が役に立つこともある。わしは、今更逸材やいうておだてられたかて、何もうれしない。今は天下の逸民で居れる方が、よっぽどありがたい。

学 すると、その逸民志願が、お前の出奔の原因か。

猿 そうそう。

学 他にほんまに何も無いのか。

猿 他の連中といっしょに歩きまわる気がせんようになってな。別にそれが愉快でなかったからやないけど、ひとりて気ままに、うろつかしてもらおと思っただけや。

学 どこぞ 他の群れのいてるところへ行くとか……

猿 別にそういう気も今のところはない。以前にそんな奴もおったけどな。その気になれば、どこへ行くとどんな群れに合うかは知ってるさかい、そうすることもできた。

学 お前らの群れは、しかし よそもんを簡単には入れんやろ。

猿 そら簡単には入れん。わしらの群れは、そういう意味では閉鎖的やさかいな。しかしとことん拒むかいうたら そんなこともない。お前かて知ってるやろ。そもそもわし自身、三年前は、よそから来たはなれサルやった。その前にいでた群れを~~を~~び出した時も気分的には、今度の場合と似たようなもんやったけど、すぐこの群れに出合うて、しばらくついてまわった。結果的には何か月かたつうち群れに入りこんで、逸民から逸材候補に変身したけどな。

学 それにしてもし 1ともあろう VIP が、ようすらっと出られたなあ。

猿 リーダーちゆうような うっかしいもんと違ういうてんのに。前にいうたようにやな、お前が以前信じこんでた通りの“リーダー”にいつもみんなが注目してあとをつけまわしてたら、一番強いサルは、はなれサルになれへんやないか。わしかて置いてけほりになりかかった話したやろ。あんな時かて、まあチャンスの一つやけど、今度のはもっと計画的で、さりげなくやった。休息中に、そのへんでちょっとした物音のもとを調べに行くようなそぶりて 消えた。行くところ行くところ連中に、金魚のうんこみたいについて来られたら そんなことはできん。

(以下次号)

## 学 体 正 心 歌 酌 斟

### 米 市 上

ある序にいわく「やまとうたは、人のこころをたねとして、よろづことのはとぞなれりける」

(1) 春過ぎて 夏来るらし 白妙の 衣ほしたり 天の香来山  
持統天皇の作。『万葉集』巻一に出る。『小倉百人一首』の第二番に見える歌である。『新古今和歌集』に拠った『小倉百人一首』では、

春過ぎて 夏来にけらし 白妙の 衣ほすてう 天の香具山  
と改ザンされ、編者の洗練の才をひけらかせた小細工ぶりがヒンシュクを買っていることは、夙に有名。もちろん世の常で、この評価に異論もある。『万葉集』の元歌を、

春過ぎて 夏は来ぬらし 白妙の 衣さらせり 天の香具山  
と訓んだものもある。大田南畝(別号を、蜀山人、四方赤良、菴徳先生)の『狂歌百人一首』の中では、

いかほどの 洗濯なれば 香具山に 衣ほすてう 持統天皇  
と解しているが、勿論これは下種の勘繰りである。現今ではパンツとカシヨーツなる代物がまかり通っているが、純性を尊び正統を奉じるなら白妙の長布が本物である。一昔前までは津々浦々の軒先や船端を飾って浜風潮風にはためき、都の大学にても殊の外に生物水中生態研究に耽溺しているあたりの窓という窓には派旗よろしくひるがえって威風学風を切り、夏の到来を告げる風物詩として毎年のごとく新聞の三面を飾った。水中生物研究はアリストテレスの昔からというが、潜水機を使って海中で生物を観察した最初の学者はミルヌ・エドワーズで1844年春のことだという(J. Dugan、『Man Explores the Sea』)。日本で最初に水中に潜った学者は某さんで、某さんが初めてスキューバを導入し、今年になって最初に長布を掲げたのは某研究室で、よろづ初めてならざるはなく、夫故にNEWSなのであり、画期的なのである。しかし、今時は画期的なのだと言骨にことのはにしなければ、画期的とはされない。天女の羽衣というのは実はこの長布のことで、だからどうしても返してもらわねばならなかったのである。流石に高貴の持統天皇は奥床しくも確かとは言えず、そのころを駈じらいを漂わせつつ白妙の衣と表現したあたりに、万づこころをたねとしてことのはとした世の純情さが窺える。

(2) 年のうちに 春はきにけり 一とせを こぞとやいはむ ことしとやいはむ  
『古今和歌集』の冒頭の歌。在原元方の作。観念的な技巧に走った駄歌であるという。どうでもよいことをもったいぶって歌の道などにことよせてもっともらしく感じた風に言うあたりが、

古今的であるとされる。しかし、本当はどうでもよいことではなかったのである。論生の論文提出の期限が迫りつつあったのである。来年春の某日までに提出せよと言われていてそのつもりでいたのだが、旧暦でならば起こりうることに気付かなかつたうかつさに顔を噛む。今年が今年ならばまだ十分間がある。あそこをもう少し突っ込んで調べ、あれとあれとを検討して、いい論文が出来そうだ。だが、今年が去年なら来年の春はもう来てしまっている。大変なことだ。だが待てよ。去年の春の次の春が今年の春で、その次の春が来年の春の春だ。だから、今が来年の春である筈はない。しかし待てよ、問題はあの教授がどう考えているかだ。あの顔付だから、どんな無茶苦茶言いがかりをつけてくるか、知れたものではない。一体、本当に、来年の春というのは何時になるのだ。脅えが混乱を助起し増幅する。乏しい判断力と自制心をも失って、あろうことが最悪の挙に出る。恐る恐る指導教授に相談したのが、この歌の本意である。指導教授のしたり顔が彷彿とする。秀歌である。

(3) 鳥の音の なべて聞えぬ 山にしも なれはなきける 郭公哉

『新葉和歌集』巻三に出る。「住吉社三百六十番歌合に、動物夏」と題し、よみひとしらずとある。知られなくなかったのであろう。ここにいう「山」は、丸頭山だとか毛沢山だとかいった名指して限定される個別特定の山ではないとされる。「山が見えた」、「山を越した」という、あの山である。だから、それ自体の姿はないが、その内容となる情景は無数にありありと想い浮かべられるものだとする。総称的な山というのでは歌意を失する。けだし山とは何かと問うてその説明を辞典や辞典に求めるにおよそ観念的で、こうした解説に涙々として悦に入っている学者が、実のところ山を見て山を見ずであることを如実に物語っている。「山には木がある」といった客観自然的を装った記述から、山というものには木というものがあるものなのだという無主体的な公式論が引き出され、「人と自然の共存」というような表現で、ヒトというものは等しく敬虔に自然を尊び共存することを希求しているものなのだという幻想を弥漫させる。

諸共に あはれと思へ 山横 花よりほかに 知る人もなし

(『金葉和歌集』、大僧正行尊)

世の中は とてもかくても 同じこと 宮も蔭屋も はてしなれば

(『新古今和歌集』、蟬丸)

共感から一体観や同一視に誘導する。山でもそうである。ここの山は矢張り、知る人には生き生きと染み染みと想起される情景があるものでなければならぬ。さてこそ、「郭公」である。一般には字数から言っても、ホトトギスのこととされる。ホトトギスは、どこでも夜も昼も駈らいもなくのべつまくなしに啼き叫ぶので有名である。某球団の応援がホトトギスと徒名される由縁である(一説にはオトギレスがなまったものとも言われる。習性に由来するとするは

誤解)。ところで、たとえば『国語大辞典』にも「ほととぎすの異名とするが誤用とあるように、「郭公」はその字のごおりカウコウを指すものである。ホトトギスと同類のカウコウは、生物分類学の祖のリッネに学名をもらった由緒ある鳥であるから、軽々には啼かない。別名をカンゴドリ（関古鳥）というように無口というより寂びしく暗いのである。であるのに、ここぞというときには突拍子もない声を発する。とにかく存在を主張しておかないと影まで薄くなる。「ここが山だ」と息をひそめ眼をこらして事の推移を見守っているときに、啼く。またおまえか、こんなときに鳴きくさって、と憤激とも怨嗟ともつかぬ詠歌。そう解すると、この「郭公」はホトトギスではあり得ない。仮に字足らずとなっても、それは敢てしてのことと見られる。そしてそうならば、この「山」は是非とも具体性のあるどこかの山でなければならなくなる。それは一体何処であるのか。こうした思惟のあやなす深い内容を秘めた歌である。

(4) 千はやぶる 神世もきかず 龍田川 から紅に 水くぐるとは

『古今和歌集』巻五に出る。在原業平朝臣の作。『小倉百人一首』にも入る。尾崎雅羅の『一夕話』には、「行平業平兄弟にて、歌詠みの名は兄の行平よりも勝られたれど、その行状は雲泥の違ひなり。兄の行平は経済の才ありて国家に益ある事を考へて、もとより心正しかりし人なり。弟の業平は体貌閑麗とて姿かたちは雅びやかなる美男なりしかと、放縦にして拘はらずとて身もちを我が儘にして物にかはらず、国家を治むべき才学はなくして和歌をのみよく詠まれたる由、三代実録にも記されたり。」と述べられている。国家に益とは政府の財政収入のことである。兄行平は官徳として功を立て、中納言にまで進んだ。文章博士菅原清公をはじめとする文人は、重用された嵯峨朝が終わると疎しく思われる。政界から離れていった中に業平もあった。管理職的指導者たらざるを得ない状況を歌の道に逃避したというのは卑俗な解釈だが、真相かも知れない。都の社寺を公にすべしという。寄進金を受けたるからには税を上納すべしという。つまり、公にすべしとは上納金を確保する口実にすぎない。坊主神主丸儲とは言葉、兄行平ならばともかく弟業平には耐え難しと映ったであろうか。官業平は失格であった。また『一夕話』に言う。「伊勢物語はもとより作り物語なれど、業平の色を好みて放蕩なりし事を譏りて書きたるものなれば、かの昔男何々と書きたる中には業平の所行の実事も多くまじはれりと見えたり。さりとてかの物語を皆ながら業平の事とせば、大いに事実を誤るべし。中にも伊勢の斎宮の御事、二条後の御事などは実事にもありけんかし。さやうの誤ちありたればこそ、正しき王孫ながら官位の昇進もはかばかしからざりけれ。」と。桓武天皇の皇女を母とした業平は、要するにほんの少々あからさまに、女性にだけ優しくったということである。

やわやわど おもみのかかる 芥川

さらに、『一夕話』は、「長明の無名抄に、業平中將の家は三条の坊門より南高倉より西にて、高倉表に近くまで侍りき。柱なども常にも似ず茅巻柱といふものに侍りけるを、いつ頃の人の

しわざにか後に例の柱のやうに削りなしてなん侍りし。長押も皆まろに角もなく、まことに古代の所と、見え侍りき。中頃晴明が封じたりけるとて火にも焼けずして久しくありけれど、世の末には甲斐なくて一年の火に焼けにけりとなれば、鎌倉將軍の時代までもその家は残りてありたと見えたり。」と伝える。今の世に残っていれば観光資源にして田舎者を集めて金を持ち上げてと思惑が湧く。本歌の意は、古典落語の『千早ふる』に詳細を極めているので省く

(5) 筑波嶺の 峰より落つる 男女川 恋ぞ積りて 淵となりぬる

『後撰和歌集』恋巻三に採る陽成院の歌。帝業に背かせ給う御振舞の故に太上天皇の尊号を奪られて御位から落し参らされ、陽成院に籠め奉られた陽成天皇である。寵愛する巨漢力士男女川が小兵筑波嶺の寄りに屈して脆くも土俵下に転落し、黒星濃く重ねるのを見て傷心の淵に沈んだということだというのが、あてにならない。無聊に夜毎車を囲み、来い、来いと恋い念じて自撰る甲斐もなく、川には捨て牌が並んで、箱てんに転落する悲哀を詠んだというのが真相であろう。昭和の世には、「雀の命は対だから、対に溺れて流されて、死ぬほど楽しい夢を見た、後はおんぼろ、後はおんぼろ、あ、今宵またしのび寄る、甲骨のブルースよ」と唄うことになる。殆ど病氣だぜと言われるほどの中毒であった。中毒とは、「生体が薬物・毒物・毒素などの作用により、狭義にはその生命を危険ならしめる症状を呈すること、広義には非合目的な反応を呈することをいう」と、『医学大辞典』（南山堂）は定義する。『言林』、『広辞苑』、『日本国語大辞典』や『生物学辞典』なども同種の説明をしている。『日本国語大辞典』には別義として、「（比喩的に）周囲の状況などになれすぎて感覚などが麻痺していること」という解を示している。これがどう比喩的なのか理解できないが、こちらは明らかに『医学大辞典』の与える麻薬中毒、アルコール中毒の定義の裡である。即ち、「麻薬を長期間使用する際、個人差はあるが段々とその量を増し逆には麻薬を使用しなければ正常な生活を営むことができない状態に至る。かかる状態を麻薬中毒という」とする。中毒によって非合目的な反応を呈するが正常な生活ができるという点は理解できる。紫煙をくゆらせコーヒーをすすりながら筆を滑らせた論説などは、正常な精神による非合目的な所産となす。一寸喫茶店へ行くにも片手に1冊の洋書、片手に桃色蛍光ペンを携える所作は、疑いもなく勉強中毒の発作である。机の上が整理整頓されていると思考が停止するというのは、一種の場所中毒である。古来、人麻呂にしても道真にしても、地方へ飛ばされた役人達はそれまで自覚しなかった雑踏中毒の禁断症状に苦しんだ。幸か不幸か大抵の町には祇園と呼ばれる一角や銀座と名の付く路地があったし、無ければ作ればよかったので、そこで都会の繁華を憶び都落ちの愚痴をたれ本庁旅を罵って地酒を愛でて痛みを和らげることができたが、後で一層の禁断症状を味わうことにしかならなかった。都の味への断ち難い想いに苛まれるのは、食中毒を併発している証であるが、それが王朝一千年の洗練の果ての味覚疲労に起因するものであることには気付いていないようである。孤

独の42、195 kmに賭るマラソン選手は、1日走るのが怠ると10日分筋力が鈍るので毎日練習をするのだ、とまことしやかに説明されているが、実は疲労中毒にかかっているのだという。某大学の体育の教官で輝かしい選手歴をもつ人の話だから、本当の事であろう。S県B研究所の某幹部研究員の最近の体験的研究によれば、疲労によって実はモルヒネ様の物質が産生され、無意識にそれによる快感を追うためだという。群生相のバツタが飛び続けるのも同様の機構によるものであろうと推測されているが、そのような視点からの研究はないそうである。嘘でなければ、垂直筋が縦筋、あるいはその周辺の血液を調べてみれば、何らかの手掛かりが得られる筈である。アラタ体（咽喉側腺）が関与していることも十分考えられる。アラタ体を取り出すのはそれほど困難ではない。みの虫のアラタ体は三角巾状に半透明の光るような細胞が並んで美しい。大体、細胞一個一個は美しいもので、それが沢山寄り集まるとどうして醜くなるのか不思議である。K大学O博士の執拗な研究によれば、金沢丸ノ内城山を根城にするガマ達には指を詰めた奴が無数にいるそうだが、それは疑いもなく指切中毒に陥っているからであろう。切傷によって指にモルヒネ様物質が産生されるかどうかは判っていないが、もしそうだと判明すればそれを採取するための指切が公然産業化すること請け合いである。その結果は想像に難くない。指切中毒が脳髄に転移したのが安請合である。一度引き受けるとのっぴきなくなるのがその症状である。何度も何度も警察の御厄介になるのは再捕中毒と言われるが、指切中毒には再捕中毒が随伴するのが常である。それによって正常な生活が維持されているのであるから別に問題はないようであるが、何か気になるころでもある。最近ではアルコール依存症など呼んで一部の中毒を他の中毒と区別する動きがあるが、依存症と言葉を変えてみたところで中身は変わりはない。遍く万物の中毒および中毒の相互関係について究めておく必要がある。自然界の不可思議の淵に泳がせる歌である。

(6) けふよりは かへりみなくて おおきみの しこのみたと いでたつわれは  
『万葉集』巻二十、今奉部与曾布の歌。年度が新たまって一日の役務が終わった帰路、中年を過ぎて少々醜くくぜい肉が付き始めた身の、どちらを見ても新顔の学生ばかりの満員の牛車に揺られて立っている苦痛を詠んだ。熟年とか突年などと隔ったような言葉を作ってみたところで、本質は何も変わりはない。この歌を忠誠心の吐露と解するのは、御時勢の為にするもの以外の何ものでもない。もっと、言葉を純真な気持で受け取るべきである。それはどういう意味か、などと問う悪癖が慣いになると、無用の疑心をかきたてるだけである。本当だと断わったのでは足りなくなって、あの高い塚の中では本当の本当と言うそうだ。一般に大学では、ほんまに本当のほんまやでと言って、さらに手振り身振りを添えなければならないという。大江山に棲んだという酒呑童子は、酒を飲み過ぎて観山を追われた僧というのが定説であるが、本当の正体は von Stein-Dodgeとか von Steindeutsch とかいう名の紅毛異人で旅行家だったが、

遭難して丹後に漂着したのを土地の人が尋ねて、その赫ら顔から直想して表記したものだ、とある歴史小説家が書いている。各地に出没した天狗の正体は、修験者などの少しばかり秀でた智者が慢心を起こして悪道に陥ち切れずにいる者という。万葉仮名ではモノに鬼の字もあてている。幽霊の正体見たり枯尾花、即ち幽霊というのは本当はススキの穂なのだということであるが、正体が見えてしまえば呆気ないものだという悟りめいた戒めも籠められている。とはいえ、寧ろ左様に簡単ではない。風邪の正体はウイルスだというのが、正体が判ったからといって風邪が呆気なく治るというものでもない。得体の知れないキノコなどはその正体が疑われたものだ。芸州の田舎ではマツタケのことをナバと呼ぶ。何となく正体不明の語感がにじみ出ているのがよい。マツタケは年々同心円状に広がって生え、その中是不毛地帯となるそうである。あのシラクモやゼニムシを想起させるが、それもそのはず、おなじ菌類だからであろう。そのキノコの正体は実は菌糸であると説明されると、はて、キノコは実はキノコではなかったのかと混乱してくる。生命の正体はさしずめ二重螺旋糸ということになるのであろうか。ならば正体ではないところは何なのだ。仮体だとはけったいなと駄じゃれでは済まないよ、これは。「例えば赤い花があるとすると、われわれはこれを、〈この花は赤い〉と表現し、主語となる〈花〉という事物が、述語である〈赤い〉という性質をもっているものだと考える。このように、性質をもつその当のものと、そのものに所屬する性質自身とが区別され、この区別が基準に据えられると、前者は独立に存在しうる〈実体〉であり、後者は実体に所屬し実体に依存してはじめて存在しうる〈屬性〉であるという考えが、そこから生まれてきます。」「屬性としてのさまざまの性質と、その担い手（基体）である実体との割離となり、実体（基体）そのものはいっさいの性質（価値的な性質も含めて）から独立した、いかなる述語的規定にも染まらない無垢でニュートラルな何ものかである、という見方に行き着きます。」（藤沢令夫、『ギリシャ哲学と現代』）。実体と屬性のカテゴリー分けを進めたアリストテレスの〈主語・述語＝実体・屬性〉の把握方式は、ひとり歩きするようになってから後世に与えた影響力と規制力にもむしろ重要性があったという。このような経緯からすれば、種の屬性とか群衆の屬性などという屬性は多分に問題をはらむことになる。正体が別にある場合と、それ自体が正体である場合とがあるのであって、いつでも別に正体があるのだという硬直したドグマに捉われていることが、そもそもの誤りなのである。それが、知的水準が低いと言ったのは真意ではないのであって、それは話の前後の脈絡を見て頂ければ判る、というような見えすいて病的な弁解を見逃してしまう低い知的水準の文明社会を作ってしまう。前後の脈絡を見れば益々明白に、それ自体が正体であって、別に真意のある筈がないことが判る。やはり、言葉は正直に受け取るべきである。素直な心を忘れては、人の心に触れて感慨を共有することはできない。ともすれば歪曲されがちな平明な歌心の正体を教える歌である。

奥野良之助

### 3. 法文3学部分離に先を越されること

ところで、京大でも東大でも、いわゆる旧帝国大学では、文化系学部として、法学部、文学部、経済学部などが存在する。ところが、新制大学である我が金沢大学は、それらが法文学部としてまとめられていた。したがって法文学部の先生方は、3つの学部に分離独立することが、さしあたっての悲願であったわけである。そうしてはじめて、旧帝大と形式的に肩を並べることになるし、教授・助教授のポストも増えるから出世もできる。理学部のドクターコース要求よりも切実であったかも知れない。そこで法文学部は、理学部のドクターにわずかおくれで、3学部分離の要求を出した。

学科増、学部増、巨大機械などの要求は、年に1度出す「概算要求」にもりこんで文部省に要求することになる。いくつも要求を並べても、そのうち通るのはせいぜい1つしかない。そこで、出すときの優先順位でいろいろとかけひきが行なわれる。このとき、法文学部はいかなる手を使ったのか、先に出ていた理学部のドクターをさしおいて、法文3学部分離を文部省に認めさせてしまったのである。

#### エピソード 2

文部省は、大学がつけた順位にしたがって要求を通すことになっている。その前年まで、理学部のドクターが1位であった。すると、今年は法文が何らかの手を使って、理学部の了解なしに順位を逆転したらしい。A教授は、そこで、夏休みに大学本部へしのびこみ、書類を盗み見たところ、果して法文が1位になっていた。これは陰謀だと大いに憤慨されたそうである。現職教授が大学本部に“しのびこんで”“盗み見する”というのも変な話だが、当のA教授が自慢そうにそう言われたのだから、事実間違いはない。

理学部発展派は落胆したが、文部省がそう決めてしまったものをどうすることもできない。

この上は、法文3学部分離をできるだけ早く片づけて（1980年発足の予定であった）、その次に期待するほかはない。

ところが、そこへとんでもない難問が舞い込んできたのである。

#### 4. 文化庁からの横ヤリ

法文1学部が3つの学部に分離独立するには、その機構も、3倍とはいかなくとも2倍くらいには増やさなければならない。そのためには当然建物を増設する必要がある。城内は狭いといってもまだ余地はあり、何とかやりくりすれば建つだろうと考えていたのだが、いざ増築しようとしたら、何と文化庁から横ヤリがはいったのである。金沢城跡は史跡として文化財保護法の指定を受けているから、たとえプレハブであろうとも一切の増築まかりならぬ、といわれたということであった。

さあ大変である。建物を増やさず3学部分離すれば、法文は教官と学生とであふれてしまう。せっかく文部省が認めてくれたのに、3学部分離ができなくなってしまうのではないか。

ところが、いちばんあわてるべき法文学部は比較的のんびりしていて、直接関係ないはずの理学部が大さわぎになった。法文分離が進まなければ、その次の理学部ドクターもさらにのびのびになるからである。文化庁の横ヤリを理学部はマジメに受けとり、法文は事態の深刻さを全く理解していない、と怒る教官も現われた。

この「文化庁の横ヤリ」なるものは、少し冷静に考えると、成り立たないことがわかる。その当時にも、そんなことはあるはずないと思っていた教官もいる。法文の教官も多くはそうだったらしい。1つは、金沢城跡は文化財保護法の「史跡」にまだ指定されていなかったことがある。いかに重要な史跡であろうとも、そこに存在しそこで業務を遂行しつつある（その内容は問わないことにするが）事業体、つまり金沢大学を無視して、文化庁が勝手に史跡に認定し、建物を建てさせぬなどと言えるはずはない。後でわかったことだが、事実文化庁はそんなこと言ってなかった。将来史跡に指定したいから、建物の増設はなるべくご遠慮願いたい、といった程度だったらしい。

ところが、少なくとも理学部の中では、とにかく一切の建物は建てられないのだ、という意見が横行していた。政治・経済にうとい理学部教官の大半は、それを信じさせられてしまったのである。

#### エピソード 3

しばらく後のことであるが、金沢大学評議会が移転を決定した時、石川県知事はすぐさま、金沢城跡の利用計画を発表した。何でも、国際会議場をつるとかいう計画で、壮大な建物をつくる予定であった。史跡指定はどこかへとんでいったらしい。当然、話が違う、と文句が出た。すると、時の理学部長で全学キャンパス問題委員

長の移転推進派、物理学科の H 教授はある会合で、「大学は建てられないが、県なら建てられるのだ」と言われたそうである。

## 5. 移転話の発端

城内に新しい建物は建てられない、城内にいるかぎり、法文分離も理学部ドクターも進まず、一切の発展は不可能である、というキャンペーンがしみ通ったころ、石川県、金沢市、そして地元の財界から、「もし金沢大学に、どこかへ移転する御希望があるのなら、県市がその土地をあっせんするのにやぶさかでない。土地代金は、空いた金沢城跡とひきかえてよい」という申し入れがあった。大学の発展を心から願っている大学人にとって、こんな渡りに舟の提案はない。たとえ少々不便なところであっても、見渡すかぎりさえぎるもの何もない広大なキャンパスに、全く自由に理想的な理学部をつくる。ドクターをつくろうと、新しい学科を増やそうと、発展の余地はほとんど無制限にある。その時、理学部教官の多くが画いた図は、こんなところだったろうか。

もっとも、どんな社会にも、みんなの理想にケチをつける、いやらしい奴が少しはいるものである。そんな夢みたいな話が実現するはずはないよ。たとえ少々広くなったとしても、建物はいまより大きくなることはないし、雪はいまよりもっと深くなるし、周りに喫茶店もパチンコ屋も飲み屋もないし、そんなところで研究や教育ができると思うかね、などという。そこで理学部では、移転に反対する奴は大学の発展を願わない“非大学人”だ、という宣伝が行なわれた。宣伝だけではなく、建物の増設も事実上ストップされ、たとえば数学科は講座が増えたにもかかわらず、建物の増設はされないままに、図書があふれて床が抜けそうになっていた。

要するに、城内にいすわっているのは全く発展はなく、移転さえ決意すれば夢のような大学ができるというキャンペーンがうずまいたのである。これといって産業のない石川県と金沢市は、観光の目玉として金沢城跡が欲しかった。しかし、いきなり城を開け渡せとっては、何もなくても誇りだけは人一倍高い大学は、うんとは言わない。ここは大学自身に移転しようと言わさなければならぬ。そして、その筋骨は見事に成功したというわけである。証拠はないが、県市の筋骨に、承知の上で乗って踊った大学教官もいたらしい。

### エピソード 4

私の友人のある教官が聞いた話では、県の商工会議所の大物財界人が、「大学の先生がこうも簡単に移転話に乗ってくるとは思わなかった」と言ったとか。世間知らずの大学の先生が、海千山千の財界人に手玉にとられたというわけだが、本当はそれだけではない。「大学の発展」といったものに、妙な色気を出したことが、だまされた根本原因であろう。

さて、理学部での移転熱は次第に上昇してきたが、かんじんの法文学部はずっと静観したままであった。他学部のことだからよくわからないが、もしいま法文が移転したいなどという、渡りに舟と城外に放り出され、中央図書館も生協もない、バスも満足に通わないようなへんぴなところへ単独で行かされ、城内の法文の建物はのこった学部に分け取りされてしまいそうだ。こは当分だまっているに限る、というようなことだったらしい。

3学部分離で当面建物を増やさなければならないのは、法文学部である。それが移転しようと言わなければ、移転話は進まない。そこで理学部は、“総合移転”なるものを打ち出した。法文だけを放り出すのではない。みんな一緒に移りましょう、という案である。しかも、城内だけでなく、城外の工学部・薬学部・医学部に附属病院まで含めて、この際金沢大学全学挙げての大移転をやったらどうか、というところまで話はふくらんだ。といっても、だれもこんな話をまじめに考えていたわけではないらしい。とりあえず法文学部に移転を決意させるための、一種の方便であったと考えておくのが当ていそうである。

#### エピソード 5

ずっと後、大学が“総合移転”を決めたころ、全学キャンパス委員会委員長で理学部長のH教授は、理学部教職員に対する説明会を開いたことがある。その席上こんなやりとりがあった。

ある助教授：総合移転というのは、医学部・病院も含めた全学移転を意味しているのか？

H 学部長：そうとは決まっていない。

助教授：では、城内学部だけの移転も総合移転なのか。

学部長：総合移転である。

助教授：総合移転と単独移転の間の線は、どこに引くのか。

学部長：線は引けない。

H 学部長は理論物理学専攻である。その人が、「単独で移転しても総合移転という」といった非論理的なことを言われたとは信じ難いが、これは本当の話である。「ある助教授」というのは私のことだから。

#### 5. 金沢城明け渡し大評定

こうして移転熱が高まっていった、いや高めていったころ、正確には1978年11月9日、理学部の管理運営について議論する理学部会（教授・助教授・講師で構成、助手は任意参加）に初めて移転問題が正式に提案された。H 学部長は、法文学部の日和見て一向に進まない移転問題

に対し、理学部が卒先して城外へ移ることを打ち出したらどうかと提案した。支持する意見もちろんあったが、何人かの中堅教官（多くは助教授クラス）が、思いがけなく強烈に反対した。

「移転についての情報が、全く私たちには知らされていない」

「事情もわからないのに移転を決議せよといっても、それは無理な話だ」

「移転はこれまで一部の有力教授が勝手に進めてきたのだから、最後までその人たちでやったらどうか。ただし、責任はすべて持ってもらいたい」

断わっておくが、これらの意見は私が言ったのではない。要するに、移転の話に乗せてくれなかった不満が噴出しただけの話である。つまり根回し不足であった。そしてこの学部会は流会となった。

H 学部長はそこで、各学科の教室会議で移転問題を議論せよ、という指令を発した。各学科ではカンカンガクガク議論したらしいが、私の所属する生物学科だけは教室会議凍結中（15年も！）なので、何の話もなかった。そして、1週間後の11月15日、再度学部会が開かれた。

各学科の主任は、教室会議の論議の結果を次々と報告した。もめた学科もありもめなかった学科もあったが、おおむね、「理学部の発展のためには移転も止むをえない」という無責任な結論ばかりであった。前回の学部会で大いに発言した教官も、たっぷり“情報”をもらったのか、すべて沈黙した。なおしつこく発言したのは、教室会議凍結中で情報を全くもらえなかった生物学科の一部の教官だけであった。

生物助教授：引越すとといっても、引越し先すらわからないではないか。バスも通わぬ不便な山奥でも引越すのか。

学部長：大学がそこへ移転したら、バスも通うようになるはずだ。ものごとはもっと発展的に考えないといけない。

助教授：学生の意見を全然聞かずに決めてしまってもよいのか。

物理教授：実際に移転するのは何年も先のことだ。現在いる学生はその時卒業してしまっている。その時にいない学生の意見を聞く必要はない。（ちなみに、この発言をされた“民主的”教授も、引越しの時はすでに停年退職されている計算になる）

助教授：移転すれば教官にはある程度のメリットがあるのかも知れないが、職員の方は何のメリットもなく、場所によってはこれまでの生活がおびやかされることもありうる。職員の見解は聞かなくてもいいのか。

学部長：職員的生活については、すべて私が責任持って考える。（移転先に家でも建ててくれるらしい）

やがて議論は打ち切れ、学部長が提案した次の決議案が挙手で採決された。反対2、保留2の圧倒的多数で、理学部は移転を決議したのである。引越し先も決まっていなかったのに。

昭和53年11月15日

キャンパス問題に関する専門委員会 御中

理 学 部 会

キャンパス問題についての申し入れ (案)

先に理学部会は、

- (1) 総合移転が望しい
- (2) 交通の便利なところ
- (3) 植物園を残す
- (4) 管理運営制度の改悪をしない

という条件で理学部移転賛成を決定したが、今回諸般の情勢に鑑み、本学部の将来計画を踏まえた校地校舎を確保されるという条件が満たされた場合は、たとえ部分移転となっても新キャンパスに移転する用意がある旨を表明する。

しかし総合大学にとっては統一キャンパスが理想であるので、昭和55年度法文学部分離改組発足を前提としつつも、できるだけ多くの部局が新キャンパス移転を決定され、なるべく理想に近い形で移転計画がまとめられるよう要望する。

このままでは理学部のドクターはフィになる、何とかしなければ、という悲鳴の聞えてきそうな文章である。「たとえ部分移転となっても」、つまり理学部だけでも、広い所ならどんな山奥にでも、引っ越ししますよ、ドクターさえつくってくれるのだったら、というのがこの案の主旨である。でも、本当のねらいは、理学部の単独移転ではなかった。独り追い出されるのをいやがっている法文学部を移転にふみきらせるのが、その真のねらいだったのである。

エピソード 6

11月15日の学部会で、各学科の主任が「何月何日教室会議を開き、これこれの意見が出ましたが、結局移転はやむをえないという結論になりました」と報告していたとき、生物の主任はいったいどう言うのだろうと、人事ながら心配になった。主任は、「先ほど奥野君の発言にもあったように、職員の意見をくみ上げるといふ問題は大変重要だと思います。それで生物学科では、現在職員の意見を聞いて回っております。ただ、まだ発表できるほどまとまっておられません」と言ってすわってしまいました。生物学科では教室会議を解散したかわりに、すべてを教授会で審議することになっているのだが、それすらやっていたらいい。そこで、こともあろうに私の発言に乗っかって急場をしのいでしまったというわけである。ついでに

言う、主任が移転についての意見を聞きにきたのは学部のあくる日だったと、ある職員が言っていた。もちろんその後、生物学科の職員の意見が学部に報告されたことはない。

## 6. 全学的大なだれ現象が起こること

理学部のこのねらいは、見事に当たったのである。学部のあと、しばらくして開かれた職員に対する説明会に現われた H 学部長は、満面に笑みをたたえてこう述べた。「ウイルソンの霧箱というのがありまして、湿度を飽和しておくと、素粒子1つの刺激で一挙に霧が発生します。これを物理学で“なだれ現象”と呼ぶのですが、今度の理学部会の決議は、全学的に大なだれ現象を起こしました。」

当の法文学部をはじめとして、城内の教育、城外の工学・薬学部がそろって、総合移転だったら移ってもよいと言い出したのだそうである。一時は、医学部・附属病院まで動きそうな気配を示したという。どうやら、自分だけ追い出されるのはいやだが、バスに乗りおかれてひとりひとり残されるのはもっといやだ、ということらしい。さすが、“知性の府”である大学にふさわしい。

かくて金沢大学は一気に総合移転へと走り始めるかに見えた。ことわっておくが、どこへ移転するのかはまだ全く話に出ていない段階である。どこへ行くのかわからんが、とにかく引っこそうということになったわけである。ただ、この全学的大なだれのただ中で、ひとり背を向けた部局があった。教養部である。教養部会で議論したのち、「教養部は現時点では移転の必要性を認めない」という結論を出した。

教養部が、そして教養部だけが、移転熱に浮かされた大学の中で、ひとり冷たく覚めていたという事実は、研究に値する現象である。もっとも、他部局のことだから、本当のところは私にはわからない。ただ、学部が発展し大きくなって、教養部には何の良いこともなく、迷惑だけがかかってくることは事実である。全学部の1年と2年（前期）の学生をあずかっている教養部は、学生が多くて今でも困っている。これ以上学生を増やされたら、きめのこまかい教育などできるはずはない。以前から教養部は、各学部の拡張計画に反対しつづけてきた。つまり教養部には、規模拡大による大学の“発展”への意欲に欠けていたのである。その意欲がなければ、街の中心部にある静かな城跡という理想的なキャンパスを捨てて、不便な山奥へ引越す気にはならないだろう。人間、欲を持つものごとが見えなくなる。

もっとも、教養部の反対の中には、もっと深い所で大学移転の危険性を見ぬいていた者もいた。それは、かつてのツクバ大学に象徴されているような、移転を機会とする大学の管理強化という文部省のねらいである。大学の管理運営、研究教育の内容は、直接それにたずさわっている各学部（の教授会）が決める、大学当局も文部省もそれにくちばしを入れられない、というのが、

「大学の自治」であり、これによって大学の研究教育は、時の権力に左右されず、自由にできることになっている。むりやり戦争に協力させられた戦時中の経験から、戦後は特にそのことがやかましく言われてきた。その、各学部の「自治」を根こそぎくつつがえしたのがツクバ大学であった。

こうした視点を重視した教養部のいく人かの教官は、移転問題をきっかけに、学外の有志も含めて、「大学のあり方を考える会」をつくり、「地域と大学と」というミニコミ誌を発行しつづけている。すでに100号を越えた。

## 7. 全学挙げての教養部いじめ

教養部会の決議は、実は「移転反対」ではない。「移転したい学部は移転してもらっても結構です。しかし、教養部は今のところ城内に残ります」というものであった。これは、「学部自治」ということから見て当然である。各学部はその必要性から移転する。教養部は必要がないから移転しない。学部と教養部とが別の場所にあっても、それほど支障は起こらない。

ところが、移転したい各学部は、この教養部の態度に激怒した。金沢大学の発展のために全学挙げて移転しようというのに、教養部が反対するとは何事か、というわけである。困った当時の学長は、教養部だけを城内に残す案を出した。これを「教養の森」構想という。「教養の森」にどんな木が生えているのかはともかくとして、この案は、学部自治という点からは妥当な案である。にもかかわらず、「教養の森」は、たちまち根こそぎ抜伐されてしまった。地元政財界に加えて文部省までが反対したからである。

つまり、この移転は、大学の発展よりも何よりも、金沢城を空けるというところに第1の目的があったということである。要するに、「金沢城明け渡し」要求であった。だから、たとえ教養部だけでも城内に残ることになれば、県市は代りの土地をあっせんしないし、文部省も金を出さない。移転は事実上立ち消えになってしまう。そこで全学挙げての教養部攻撃が起こったわけである。それは、「多数の意見にしたがわないのは怪しからん」という単純なものから、「教養部にも何かメリットをつけてやろう」といういやらしいものまで、色々であった。この情況を利用して大きな設備をつくってもらった、たくましい教養部の先生もいたようである。

手をかえ品をかえた教養部攻撃も、しかし、教養部の態度を変えさせることはできなかった。そして遂に、全学評議会における教養部圧殺へと進んでいくのである。

### エピソード 7

金大教職員組合でも、移転問題は色々検討した。その検討会の1つで、最近建設省の研究所から工学部の教授に転出してきたある先生が話をされた。「石川県の大きな土木事業といえば、手取川ダムの工事で、これはもう終る。次は北陸新幹線だ

が、どうもおくれるらしい。だから、いまずぐ移転すれば、相当な金が出る。ツクバのような素晴らしい大学にしようと思ったら、今がチャンスですよ。」何でこんな人を“組合”が講師にしたのかよくわからぬが、さすがは元建設省の役人、たしかに本質を突いている。

## 生物学誇大事典

コウテンセイキョウジュガンボウショウコウグン (後天性教授願望症候群)

### Acquired Professor-Eagerness Syndrome

この長い名前の病気は普通、頭文字をとって A P E S (エイプス) と呼ばれています。ところが、「この病気は人間にしかかからないのに A P E (猿) とはけしからん！」と、雲の上の猿から抗議があったという未確認の情報もありますので、ここではエイプスとカタカナで書くことにします。しかし、猿にはこれとよく似た病気で、「ポスト願望症候群」のあることが知られています。

エイプスの第一の特徴は、助教授がよくかかるという点です。しかし、助手も時々発病することがあります。また、教授はかからないというのが、エイプス研究費分捕り学会の定説で、名称からも当然そうでなければならぬはず。にもかかわらず、助教授時代の症状が後遺症としてそのまま残っているところか、ますますひどくなったという例も沢山あるので、学会というのもあまりあてにはならないようです。

エイプスの主な症状を挙げると、以下の通りです。

1. 廊下で、しかも大きな声で、学生の指導をする。
2. 学会のウラ話に精通しているかのごとき話をする。
3. エライ人達との付き合いが広くて、コネがあるような話をする。
4. 留学や国際学会で、何度も外国 (特にアメリカ) に行く。
5. 研究費をとってきたという話をする。

病因については、世界中で大がかりに研究が進められていますが、現在のところウイルス説が極めて有力であると考えられています。しかしまだ「白さも白き富士の白雪」ほどの確証はないようです。というのは、世界で初めてエイズウイルスを発見したと発表した研究者が、助教授だったからです。そのために、その研究発表もこの病気の症候群のせいではないかと疑われ、実験の再現性を確認中であるという情報が入っています。

ことほど左様に世界中で流行しているわけですが、このエイズウイルスの感染経路は、垂直伝染による場合が多いと考えられています。特に密室で二人きりの時、教授に頭をなでられると、まず100%感染します。それが証拠に、教授と仲の悪い助教授や助手には、決してこの病気は見られません。従って、この病気にかかりたくない人は、教授とケンカしてさえいれば大丈夫なのです。潜伏期間は決まっていますが、教授が停年に近くなると急激に発病率が高くなります。

エイズを地球上から根絶することは、教授という職がある限り不可能であるとされています。知られている唯一の治療法は、教授に出世する可能性が無い事を、本人に悟らせることです。その場合、病気の予後は極めて良く、ほとんど数日のうちに全快することさえあります。しかし、不幸にして教授に出世してしまった場合には、まったく治療法はなく、死ぬか、あるいは停年まで治らぬ不治の病になってしまいます。

エイズの発症機序や病原ウイルスの性質等については、未解明の部分がかかり残されています。しかし、すでに述べたように、予防法は確立しており、さらに確実に流行を防ぐ効果があるとされている手段もあります。それは講堂の運営を民主化して、教授独裁を許さないことなのです。特に人事が教授の独断で行なわれるのではなく、公開の場で、一定のルールの下で行なわれる必要があります。これだけでは、この病気を根絶はできないにしても、流行は下火になると考えられています。しかし新聞によると、大学審議会が設置されて、助手の任期性が導入されようとしているようです。そうなれば、ますます教授の権力が強くなり、この病気もますます広がるものと予想されています。

## < 編集者への手紙 >

日本生物学会のみなさま

私はただ今〇〇県××高校の3年生です。来年「カモ」になって大学受験しますが、おそらく金大は受験しないでしよう（頭がたりないから）。<頭がたりているから、だろう — 会長>  
さて、昨年四月に入会以来1年が過ぎてしまったのに、会費を滞納してしまったので、学会誌が第23号以来届きません。ここに60円切手2枚を同封して、今年の会費といたしますので、新版ができ上がっていましたら送り届けて下さい。なお20円は、私のささやかなる寄附ですので、ご遠慮なく。  
最近「朝日ジャー」などを読み始めましたが、学会誌のほうが読みごたえがある——わけないですよ。会長をはじめとするみなさん、死ぬまでがんばってください。<死んだらあと頼むで — 会長> さよなら。

会長からの返事

学会誌が届かなかったのは、会費滞納のせいではない。23号以来発行していないからである。ないものは送れない。会員になってまだ日が浅いから無理はないが、そんなことにおどろいていては、当会会員は動まらない。もっと精神を大きく持ちなさい。

表紙のオニさんが可愛いので入ることにしました。<そんなことで入ってもいいのかね — 会長> たかだか問合せの往復ハガキ一枚でバックナンバーを20冊も、350円もの大金をかけてただでくれるとは夢にも思いませんでした。<それが会長の悪ラツな手なんだよ — 第3編集局長> 今とき珍しいことだと思い、心が暖まりました。<そのうちぞっとして、心が冷えるよ — 第2編集局長> 会費も「金はあるところから取る」といったような趣旨は素晴らしい。<「金はあるところから取」っているわけではない。エラクな奴から「罰金」として取っている。最近に乗ってる車から見ても、100円会員の方が金持ちだもんね — 会長> 私はとうぶん、かなりとうぶん、100円ですみます うれしい。<こんなことくらいでうれしがっていたら、この学会の会員はつとまらないよ。とにかくすぐだますのだから、会員を — 第1編集局長> あんまりうれしかったから送料350円を寄附してあげようかと思ったけど、金欠病なのでやめます。<その気がないのならはじめから書くな — 会長> ありがとうございました。

◎ 会長と第2編集局長の会話

(この3月、わが第2編集局長は、無事“学業”を終え、社会に旅立ちました。)

2局長：長らくお世話になりました。

会長：長らくおったことはたしかやけど、世話した覚えはないで。

2局長：そらそうですけど、こんな時はこういうもんでしょう。

会長：心にもないことは言わん方がええ。昔、まだ学生のころにな、ある友達が結婚することになってな。2局長：何

2局長：何の話ですか、一体。

会長：タメになる話や。まあだまって聞け。しゃあないから唯一の同級生の水原と2人で、お祝いやることにしたんや。

2局長：水原サンで、今度長い長い原稿送ってきた人ですか。

会長：そうや。それでな、本人を呼びつけて、何かお祝いやるから欲しいもん言え、言うてな。

2局長：ほんまにそんなこと言うたんですか。エゲツないなあ。

会長：そやかて、要らんもんもろでもしゃあないやろ。何が欲しいか、一番よう知ってるのは本人やないか。

2局長：そらそうですけどね。それでその友人、どう言いました？

会長：えらい恐縮してなあ。いいえ、そんなことまでしていただかなくても、そのお志しだけで充分です、いうて断わりよった。

2局長：会長や水原サンの友人にしては、えらい言葉使いのていねいな人ですね。

会長：そらそうや。女性やもんな。

2局長：エエッ、女の子に！

会長：驚くことないやろ。男女同権や。それに、この人は並みの女性とは違うて、少々のことでは驚かん人や。

2局長：それで、断わられたからやめたんでしょう。

会長：そんなんやったら何もタメになる話でなくなる。その時すかさず、水原が言いよった。お志しがあるんやったら初めからお祝いなんかやる言わへん。お志しがないから、モノをやるうと言うてんのやないか。

2局長：……ようそんなこと言うわ…… それでどうなりました？

会長：さすがのその人もあきれてしもうてな、中華ナベか何か、そのころの我々としては結構高いもの注文されて、えらい目に会った。口は禍いのもとや。

2局長：あとで損するようなことは言わん方がええ、という話ですか。

会 長：もう卒業やというのに、君も一向に成長せん男やなあ。そんなつまらんことやない。人間、心があればモノなど要らん。心がない時にはモノを贈る、という話や。そやから、何かモノをもろたら、ははん、こいつは心がないんやな、と思たらええ、という話や。

2局長：そんなこといったって、まだモノなんかもろたことないから、わかりませんよ。

会 長：逆に言うたら、本当にお世話になったと心から思てたら何もなくてもええけど、お世話になったと思てないのに、お世話になったふりをしたいのなら、モノが要る、ということや。

2局長：ははあ、なるほど。いや僕は、この数年、言葉に言いつくせぬほどお世話になったと、心の底から思ってます。ほんまでっせ。

(2局長はこの夏、「紀州備長炭の念入仕立」という、何のことやらわからぬ炭火焼コーヒーを送ってきた。現役編集局長と共に飲んでしまってから、こういうことを言うのも気がひけるが、どうやら彼は、心がなかったことに気がついたらしい。)

会 長：それはええけど、お前、第2編集局長を辞任する気があるんか。

2局長：第1編集局長は辞任せんと就職してしまったんでしょ。僕がここで辞めたら、良き伝統をつぶすことになりますね。

会 長：そんなもんつぶしたってかまわんが、つぶさんでもかまわん。君が2局長持って行ったら、3局長いうのもつくったらしまいや。

2局長：3局長の候補者、だれかいますか。

会 長：お前が推薦していけ。最後の仕事や。

2局長：D君なんかどうですか。

会 長：あんなええ加減なやつに勤まるかねえ。

2局長：僕でも勤まったんやし、第1編集局長いうたって何も仕事ないやないですか。

会 長：それもそうやな。身体も丈夫そうやし、あいつに決めよう。

2局長：ところで、今年の「学会誌」の表紙は何色にするんですか。

会 長：そうやな。そろそろ灰色なんか使うか。

2局長：1局長が卒業した時、バラ色の未来を期待してピンク色にしたんでしょ。僕のときは灰色ですか。

会 長：そんなこともあったなあ。まあ、心にもないことを言う時はモノにして示せと言うたばかりやから、君の前途を祝福して、今年の表紙はピンクにするか。

### ◎ 会長と第3編集局長の会話

会 長：おい、お前を第3編集局長に任命したから、よろしく頼むで。

3局長：2局長から聞きましたけどね。そんな沢山編集局つくって、どうするんですか。

会 長：別にどうもせん。あってもなくても同なじょうなもんやから、沢山つくっても別に困る

ことはない。

3局長：あってもなくても同じでしたら、つくらんでもええやないですか。

会 長：そらまあ、そうやな。そやけど、せっかく発令したんやから、君、やれ。

3局長：まあ、2局長の話では、原稿さいそくに行くところとコーヒーとケーキが出るということですから、やってもいいですけど。

会 長：そんな甘いもんやないで。ケーキまで出さそうと思たら、相当しつこくねばらんとあかん。君はねばりのないのが特徴やから、まあ無理やろな。

3局長：それなら何も役得がないやないですか。

会 長：そのかわり、いつも編集局に出入りして、そこらにあるコーヒーが飲めるで。

3局長：編集局いうたって、この部屋のことでしょう。これまでずっとやってきてますよ。

会 長：それもそうやな。まあ、大きな願して飲めるというこっちゃ。これまでも大きな願して飲んどったけどな。

3局長：ところで、24号の原稿集まったそうですね。

会 長：何とかな。これや。

3局長：ええと、水原洋城「猿学パンサイ」……

会 長：「猿学パンサイ」とちゃうで。「猿学マンサイ」や。

3局長：マンサイやったら万才と書くんでしょう。万歳ならパンサイですよ。

会 長：昔は万歳と書いたんや。

3局長：水原ヨージョウというのは、きれいなペンネームですね。だれのことですか。

会 長：ヨージョウやない。ヒロキと読むんや。本名やで。ついでにいうと、奥さんはヒロコというんや。1字違いや。

3局長：そんなことどうでもいいですけど、いつも会長が言ってる、あの水原さんですか。会長よりも口が達者やという……

会 長：そうやそうや。君の口にガムテープ張ったら1日と持たんやろな、というたら、1時間で死んでしまうわいと威張った男や。

3局長：そんなことでも威張る材料になるんですか。

会 長：当たり前や。これは少なくとも“なか味”を材料にしてるから、立派なものや。世の中には、教授になったとか学部長になったというだけで、威張るやつが沢山おる。

3局長：学部長になって威張ったらいかんのですか。

会 長：いかん、いかん。学部長などというつまらぬものにならされた、いうて、嘆き悲しまないかん。

3局長：そんな人は初めから、学部長にならしてあたらんでしょう。教授にさえならせてもらえない。

会 長：まあ、そういうことや。その代わり、会長になってるけどな。

3 局長：会長は威張ってもいいんですか。

会 長：これは実力でなったんやから、威張ってもええ。

3 局長：勝手に自称しただけやないですか。

会 長：まあそうやな。あんまり深く迫するな。編集局長かて似たようなものやから。

3 局長：僕は威張ったりしませんよ。

会 長：そらそうやろ、まだ何にもしてへんのやから。

3 局長：内緒ですけどね。いま未完の大作を書いてるんですよ。

会 長：初めから未完やいうて、わかってるのか。

3 局長：当たり前ですよ。僕が書いたものが完結すると思ってるんですか。

(予言とおり、この大作は未完で、この号には間に合わなかった。遂に幻の大作になってしまうかも知れない。)

??? 会 計 報 告 ???

1986年4月 ~ 1987年3月

収 入		
1000円会員	34人	3400円
10000円会員	117人	117000円
20000円会員	9人	18000円
寄 付	1件	130円
小 計		138530円
前年度くりこし		97910円
総 計		236440円

支 出		
上 質 紙	15000枚×2円	30000円
表 紙	1000枚×3円	3000円
ファクス原紙	90枚×70円	6300円
印刷インキ	3本×900円	2700円
送 料	22・23号その他	7000円
封 筒	500枚×3円	1500円
計		113500円

差 引 次年度くりこし 122940円

<監査報告>

送料がキッチリ7万円、などということは、だれもがウソだと思うに違いないが、世の中には  
 偶然ということもあり、ウソではないとは言いきれない。まあ、毎年偶然が多すぎるけど。

日本生物学会会計監査 夢籍 忍次郎 印

会長より

くりこし金が遂に10万円の大台を越えました。これはひとえに、原稿を書かずに会費ばかり  
 おさめる“不良会員”が多いせいです。まあ、金がいくら余っても、私は困りませんけどね。

## 「日本生物学会」 設立趣意書

なんにも目的はないけれど、「日本生物学会」なるものをつくろうと思う。動物学会や植物学会はあるが、日本にはまだ、生物学会と称するものはない。しいていえば、それが設立の動機である。

会の目的はないが、事業はおこなう。

その一つは、会誌の発行である。これを「日本生物学会誌」と名づける。刊行は不定期とし、原稿が集まり次第発行する。したがって、原稿が集まらなければ、永久に発行しない。内容は、会の名称にふさわしいものとする。ただし、“生物”には当然人間も含まれる。たとえ天文学でも、もしそれを人間がやったのならよいことになる。また、“日本”生物学会であるので、日本語以外は受けつけない。受けつけた原稿は、無審査・無修正のうえ、無責任に掲載する。

第二の事業は、「大会」である。年一回金沢において開く。大会は、しゃべりたいものがしゃべり、聞きたいものが聞くことによって成立する。したがって、しゃべりたいものがいなければ直ちに解散する。（聞きたいものがいなくても同様である） 二次会はさまたげない。

会員の資格は“非教授”とする。要するに、教授以外であればだれでもよい。もっとも、教授以上の社会的地位の方は、おことわりすることがある。

会員の義務は、会費をおさめること、及び、会費の行方について、深く追及しないことである。会費は当分の間、定職についているもの年1000円、定職なきもの年100円とする。善意の寄付はこれをこばまない。ただし寄付しても、何の特典も与えない。

会の“管理・運営”は、当分の間、会長の独裁とする。会員は会長に対し、団交権を持つ。したがって、総会は開かない。団交は文書でおこなってもよい。

本部は、金沢市丸の内1の1 金沢大学理学部生物学教室 生態学第一研究室 におく。連絡はすべて本部あてにおこなうこと。

各地に支部を設立することが望ましい。支部長は自称すれば直ちに発効する。支部の管理運営は支部長の独裁とし、本部は一切関知しない。

以上の趣旨に賛同の方は（あまりいるとは思わないが）、あるいは賛同しなくとも、同封のカードに氏名・住所・電話番号をかき、会費を同封して、本部まで送られたい。会誌の発送をもって受領書にかえる。原稿がなければ永久に出ないことを御了承のほどを。

1977年5月26日の佳き日に

会長 奥野良之助

## < 会 則 追 記 >

教授もしくはこれと同等の社会的地位にある者で、どうしても入会を希望するものは、“不名誉会員”とし、会費2000円を徴収する。

学部長、学長もしくはこれに同等な社会的地位を有する者で、何としても入会したい人は、“特別不名誉会員”とし、会費4000円を徴収する。

現普通会員も、出世したときは、これらに準ずる。

会費の送金は、郵便局の下記振替口座を利用するのが、最も安上り(1回15円)である。もちろん切手でもよく、100円を書留にして350円かけて送ってもらっても、当方は一向に差支えない。

金沢 40763 日本生物学会

## 日 本 生 物 学 会 誌 投 稿 規 定

- 1 日本語に限る。
- 2 漢字はなるべく当用漢字に限ること。タイプの括字がない時は、勝手にカナにかえることがある。
- 3 原稿の長さの制限はしない。ただし、1号は100枚(400字づめ)しかはいらないので、適宜分割掲載することがある。
- 4 形式・内容とも、全く自由とする。読む・読まないは読者の自由であるから、読者のことなど考えずに書けばよい。
- 5 匿名、実名、ペンネーム、いずれも可。もちろん本名でもよい。
- 6 いずれの場合も、肩書、所属などは不要。
- 7 寄稿者には本誌5部を進呈する。別刷のほしい方は、原稿にその旨誌しておくこと。
- 8 図、写真も可。ただし写真はおそらく、何が何かわからなくなるものになる。

1982年8月 改訂

(1977年7月の第1号35ページ

記載の投稿規定は、廃棄処分とする)

日本生物学会誌 第24号 1986年8月31日

編集・発行 日本生物学会

金沢市丸の内1の1

金沢大学理学部生物学教室

生態学第1研究室内

編集無責任者 奥野良之助

許可無断転載